

調査研究報告

第 5 号

目 次

〈資料報告〉埼玉稲荷山古墳中堤発見の朝顔形円筒埴輪	
	若松 良一 ……………1
形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼（上）	
—埼玉瓦塚古墳の場合を中心に—	若松 良一・日高 慎 ……3
古墳詳細分布調査 試掘・測量調査の報告	
	県立さきたま資料館・学芸課 ……21
企画展「くらしの中の神々」覚書	石川 博行 ……………41
〈資料紹介〉農家の手紙	
新収集資料「手習双紙 普通農用文」から	田中 裕子 ……………53

平成 4 年 3 月

埼玉県立さきたま資料館

はじめに

本館は、埼玉古墳群を中心とする古墳時代の考古資料、及び県北地域の有形民俗資料の収集、保管、展示、調査研究、並びに貴重な国指定史跡である埼玉古墳群の保存整備、活用を事業の根幹として館運営に努めてまいりました。

幸い来館者、利用者は他の類似機関に比べて多く、これが職員の館事業展開の励みにもなっております。

多数の来館者、利用者が来られるということは、展示をはじめとして古墳の保存整備、教育普及活動等の各分野において、多様な視点に基づく多様なニーズに答えてくれるものと期待されていることにほかなりません。館としてもこうした利用者のニーズを察知し、可能な限りそれらに答える努力をすることが必要です。それは一にかかって着実な調査研究を基礎として、はじめて可能なことであります。

最近各地で、素晴らしい調査成果や研究が続々と報告され、正に日進月歩の感がいたします。これらの成果に学びながら、調査研究に携わるものは絶えず新鮮な目と感動する心を持ち、課題解決の意欲に燃えて対象に対することが肝要だと思われます。日頃何気なく見過ごしていることの中にも、視点を変えて見れば、今まで気づかなかった真実の顔を垣間見ることができます。

本書に収載してある幾つかの論稿は、そうした視点に基づいて、日常の業務運営のなかから館職員がつかみとったものであります。

本書が多数の人々にご覧いただいて活用され、埼玉文化の向上に些かなりとも役立ち得れば幸いです。

平成4年2月17日

埼玉県教育局指導部参事
兼埼玉県立さきたま資料館長

大 村 進

<資料報告>

埼玉稲荷山古墳中堤発見の朝顔形円筒埴輪

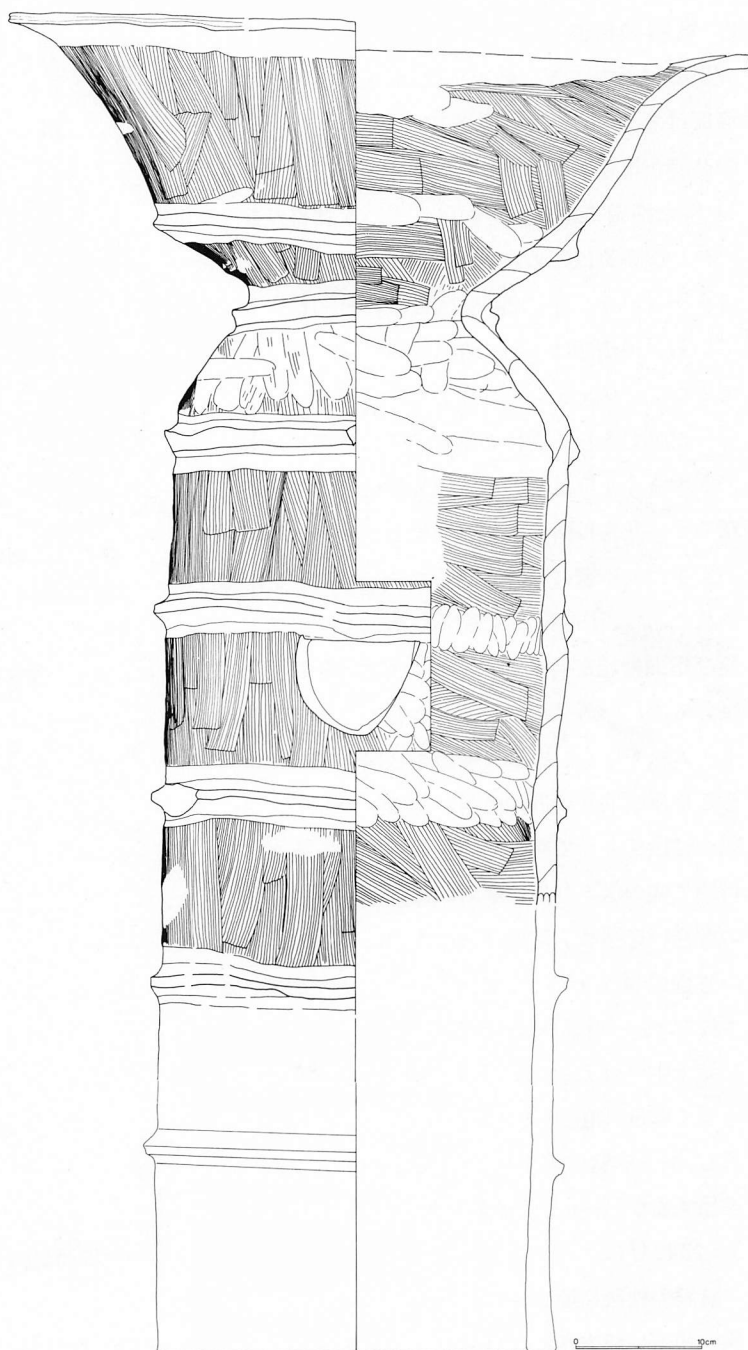
若松良一

1. はじめに

平成3年4月初旬の水ぬるむ頃、近所の住民から古墳巡回中の我々学芸員に緊急の通報があった。それは稲荷山古墳西側の内堀の水際に大型の埴輪が露出していて、放置しておく和水没や盗難の心配があるというものだった。

さっそく、大友学芸課長と大和学芸員、若松の3名は取り上げの用具を携えて現地に急行し、現状を観察したところ、大型の朝顔形円筒埴輪がほぼ形をとどめた状態で横たわって露出していた。口縁部は内堀の水中に没しており、底部方向は土手の斜面の中に入り込んでいた。おそらく、中堤の内側の埴輪列中の1本が内堀の中に転落したものであろう。資料に新たなキズをつけぬよう細心の注意を払い、水につかりながらの作業は夕刻に開始し、完了をみたのは午後の8時であった。

資料館に持ち帰り、水洗と注記をすませ、接合を



第1図 稲荷山古墳中堤発見の朝顔形円筒埴輪 (1/6)

形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼（上）

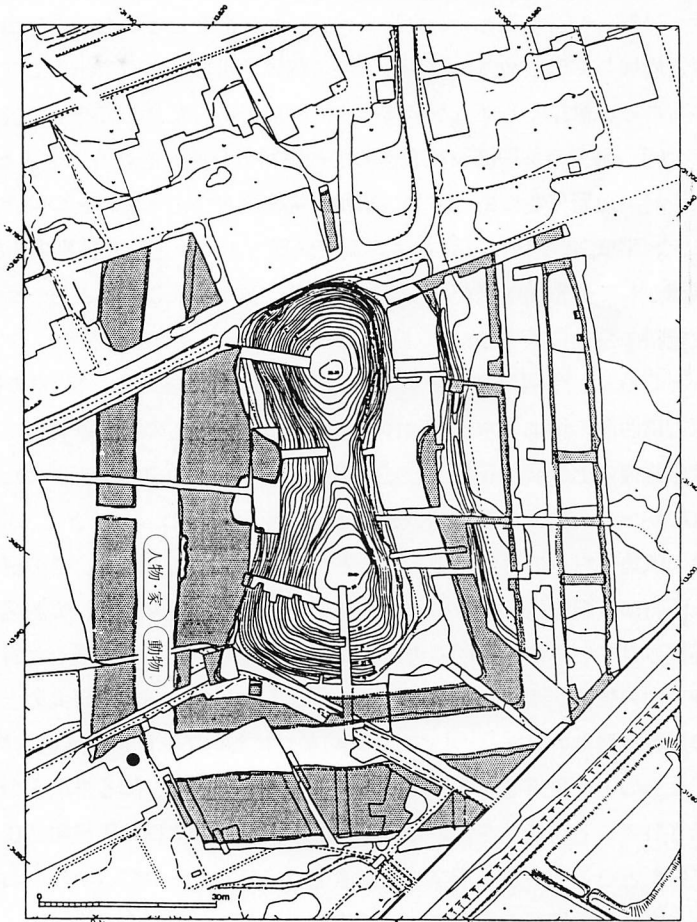
— 埼玉瓦塚古墳の場合を中心に —

若松 良一・日高 慎*

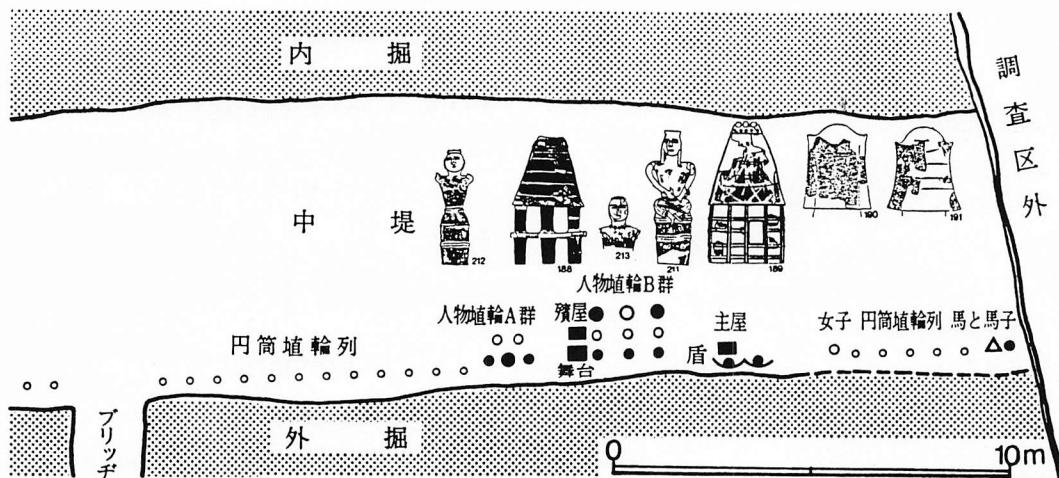
1 はじめに

埼玉県行田市にある国指定史跡埼玉古墳群は、巨大円墳1基と8基の前方後円墳を中心とする関東地方最大級の古墳群である。その中において、瓦塚古墳は墳丘の現存主軸長67mと小規模な前方後円墳である。しかし、昭和54年度以来4次にわたる範囲確認調査と昭和63年度以来4年間に及ぶ保存修理工事に伴う発掘調査によって墳丘の形態はもちろん、内堀、中堤、外堀などの外部施設が十分に解明された古墳として学術的には特別な意味をもっている。特に昭和57年度には、前方部西側の外堀内より、中堤から転落した状態で多数の形象埴輪が出土しており、形象埴輪研究の上で絶好の資料となっている。その成果については、既に『埼玉古墳群発掘調査報告書第4集瓦塚古墳』として埼玉県教育委員会より昭和61年3月に刊行されているところであるが、平成2年度にはその南側の隣接地が発掘調査され、さらに馬や水鳥、犬などの動物埴輪と人物埴輪の新資料が出土し、今春、『埼玉古墳群発掘調査報告書第8集二子山古墳・瓦塚古墳』として刊行される。

このように、瓦塚古墳の形象埴輪群は、ようやく、その全貌が知られることとなったわけであるが、形象埴輪の組成が豊かで、あらゆる要素を含んでいることと、原位置の推定が可能であることから、総体として、これらが何を意味するのかという根本的命題を解明する上で、極めて良好な資料であるということができる。本稿では、このことを



第1図 瓦塚古墳の形象埴輪配置(1/1,000 黒丸は盾持人埴輪出土推定位置)



第2図 形象埴輪群配置復原図（人物の中黒ドット：男子、白抜：女子）

究極の目的としているが、目的達成のためには、まず、基礎作業として、構成要素の単位となる一個一個の個体を可能な限り復原し、その原位置の推定作業を行う必要がある。しかし、言うは易く、行うは難しの言のごとく、実際には完形品が形をとどめた状態で出土する場合は稀で、多くの個体は、崩壊して広い範囲に散乱し、他の個体と重なりあって出土しており、胎土や色調の近似するものもあり、遺存する部分が全体のごく一部であったりして決して復原作業は容易ではない。

今回、過去の整理済資料を含めての資料の見直しを行うこととなったきっかけは、平成2年度出土資料の復原作業にあたって、昭和54年度調査区出土資料との接合関係が考えられたからである。また、平成5年度には瓦塚古墳の調査成果をテーマとした特別展の開催計画があり、その主要展示候補として形象埴輪群があげられている。我々は、このことを一つの機会として捉え、瓦塚古墳出土資料の整備に着手した。

ところで、今回資料紹介する盾持人埴輪は「さきたま」第3号に掲載したように、昭和32年、瓦塚古墳西側の畑地を水田に改作中、偶然出土したものを、所有者である川崎栄一氏が当館に寄託し、復原修復の上、展示資料として活用してほしいとの申し出を受けたものである。発掘調査中にみられなかった盾持人埴輪が構成要素として新たに加わったことと、出土位置が第1図に示すように中堤の隅角部付近の外堀内であることが確かであることから、この資料の学術的価値は極めて高い。

同時に資料を提示するのは、昭和57年度出土資料のうち、実測図の掲載のないものと、実測図が掲載されているが、今回の再検討によって復原が大きく進展した資料である。新たに武人などの全身立像の特徴が明らかとなったことは、人物埴輪の編年的研究の上でも有意義であった。瓦塚古墳の形象埴輪群の意味については『第4集』において、配置復原図（第2図参照）を掲げて、殯を再現したものと見方を示し、特に吹放ちの建物と弾琴、踊る群像との関係から「たまふり」の場面が示されている可能性を説いた。これには、橋本博文氏や辰巳和弘氏からの批判もあり、再論を期していたところである。現在、復原途上の資料もあるので、次号において残りの資料の提示を行ったうえで、葬送儀礼の復原について論じることとしたい。

（若松 良一）

2 形象埴輪の個別的観察

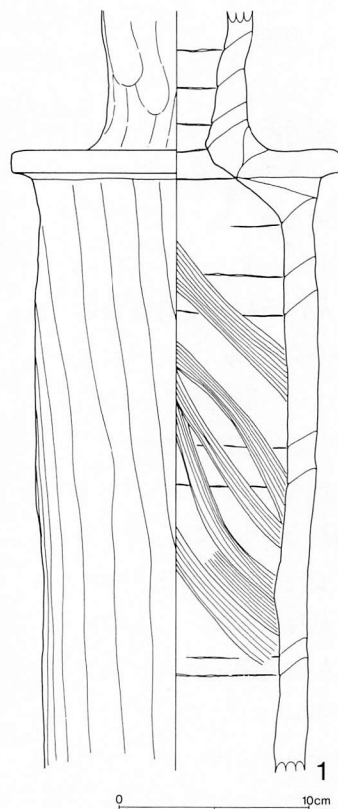
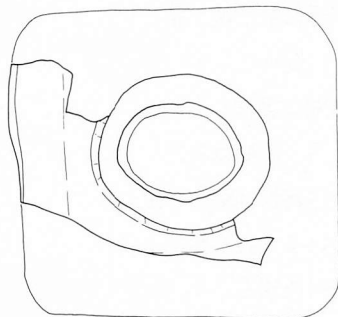
1. 器財埴輪（第3図）

この資料は『埼玉古墳群発掘調査報告書第4集瓦塚古墳』（以下『第4集』）の206、207に相当し、残存高40cm、上端から8cmのところには一辺17cmの方形の鏢状突出部が付く。鏢状突出部を境に上部は径8cm、下部は15cmの円筒部になっており、厚さは1.5cmである。浅黄橙色（10YR8/3）を呈し、石英、チャート、角閃石、白色パミスを少量含み、全体として精緻な胎土である。焼成は良好であり、外面はタテハケ（1.5cm/10本）及びナデを施し、内面は斜位のナデの後、斜位のハケ（2.5cm/10本）を一部に施す。円筒部は粘土紐を積み上げて成形しており、内面にはその接合痕が残っている。鏢状突出部は、粘土板を円筒部に貼り付け、接合部の隙間に粘土を充填している。同様な破片の存在から、当初はさらに二・三个体樹立されていたようである。

この資料は、上部及び下部構造が不明である。一応器財埴輪と報告したが、具体的には大刀形埴輪が考えられる。それは、把口部に三輪玉を配した破片などが存在するからである。しかし、直接に接合はせず、類例も確認できないので、今回は可能性にとどめておきたい。

2. 人物埴輪・女子（第4図）

『第4集』の240の腕部がこの資料に接合している。島田髷の一部、額から右頬、首から胸、右腰が残存し、その他は復原である。浅黄橙色（10YR8/3）を呈し、石英、チャート、角閃石、酸化鉄粒を少量含み、全体として精緻な胎土である。焼成は普通であり、肩及び首の一部と腕はハケ（2.3cm/10本）を施し、その他はナデを施す。島田髷は粘土板で、眉は粘土を貼り付けて表現している。目はほぼ水平に細く開けられている。首には円形浮文を配した粘土紐によって首飾りを表現している。腕は棒に粘土を肉付けし成形しており、四指は粘土紐によって別々に製作している。両腕ともに前方に突き出す姿態であるが、右手はほぼ水平に、左手はやや下方に向いている。右手の指の曲り方からすると、壺などの器をささげもつのではなく、上部をやや前方に向けた棒状のものを持っていたようである。あるいは、四ツ竹などの鳴り物を持っていたのかもしれない。



第3図 瓦塚古墳出土器財埴輪

3. 人物埴輪・男子（第4図）

『第4集』の219に相当する。残存高は31cmである。『第4集』では右手を上げる踊る男子と報告したものであるが、今回の接合結果により両腕を腰部付近まで下げる姿態であることが判明したので訂正しておきたい。赤色（7.5R4/8）を呈し、石英、チャート、長石、角閃石、白色パミスの粗砂を多く含む。焼成は極めて良好であるが、やや表面はもろい。頭髮は頭頂溝があることから振り分け髪であり、後頭部から背中にかけては垂髪を粘土板を貼り付けて表現している。粘土貼り付けの様子から、垂髪は後頭部の髪だけで形作られていたことが分かる。耳は残存していないが、右耳下部に粘土塊が貼り付いており、耳飾りもしくは美豆良の表現と思われる。顎部は粘土板を貼り付けて製作しており、ヘラ工具ではぼ水平に細い目と口が開けられている。腕は中実であり、拇指のみ別に製作している。外面は胴部と垂髪、首の一部がタテハケ（2.2cm/10本）、その他はナデである。内面は胴部がヨコハケ（2.2cm/10本）、首からはナデである。

この資料は腰から上のみであるが、胎土、色調、焼成などがほとんど同じであり、同一個体と考えられる大刀を佩する腰部、裸足の台部も存在する。さらに、極端に締まった腰などから全身像となる可能性もある。

4. 人物埴輪・全身像台部（第5図）

残存高13cm、台部復原径23cmを測る。赤色（7.5R4/8）を呈し、石英、チャート、長石、角閃石、白色パミス、火山ガラスを多く含む。焼成は極めて良好である。外面は全体にナデを施しているが、台部の三角形凸帯の剝離面には一次調整のタテハケ（3.2cm/10本）が確認できる。内面はナデである。円形の台部のドーム天井に粘土塊を貼り付け、やや内股の足を製作しているが、注目すべきことはその先端にヘラ工具で線刻を入れている点である。この線刻によって五指を表現したと考えられる。足首より上は残存していないが、履物および衣服の表現が見られないことから、裸足の全身像の台部と考えられる。

5. 人物埴輪・全身像台部（第5図）

残存高14cm、台部復原径23cmを測る。橙色（5YR7/6）を呈し、石英、チャート、長石、白色パミス、酸化鉄粒の小礫を多く含む。焼成は良好である。外面はタテハケ（1.8～2.2cm/10本）を施し、内面は斜位のナデである。凸帯は均整のとれた台形を呈する。円形の台部のドーム天井に粘土塊を貼り付け、やや内股の足を製作している。4と同様、足の先端にはヘラ工具で線刻を入れて五指を表現しているが、かなり扁平な足になっている。左足の剝離面には、台部のタテハケが確認できる。この台部と6の武人埴輪は胎土、色調、焼成などがかなり共通しており、同一個体である可能性もある。

6. 人物埴輪・武人（第5図）

『第4集』の199に相当し、腰部から草摺部、右脚部が残存する。外面は橙色（5YR7/6）、内面は赤色（10R5/8）を呈し、石英、チャート、長石、角閃石、白色パミス、火山ガラスの粗砂を多く含む。焼成は良好である。左腰部には大刀を佩いており、断面長方形の鞘部と把口部の一部が残存する。草摺は三枚の粘土板を重ねることによって表現しており、忠実なつくりである。脚部は粘土紐を輪積みして製作しており、膝下で足結を結び、結び紐が下がっている。脚部および草摺部、

大刀はナデを施し、その他はタテハケ（1.8cm/10本）である。内面は縦位及び斜位のナデを施す。

この他同一個体と思われるものに、冑の鍔部や腰帯、革甲と考えられる破片も存在する。腕などの破片は確認できないが、抜刀スタイルの武人となる可能性が高い。

7. 人物埴輪・武人（第6図）

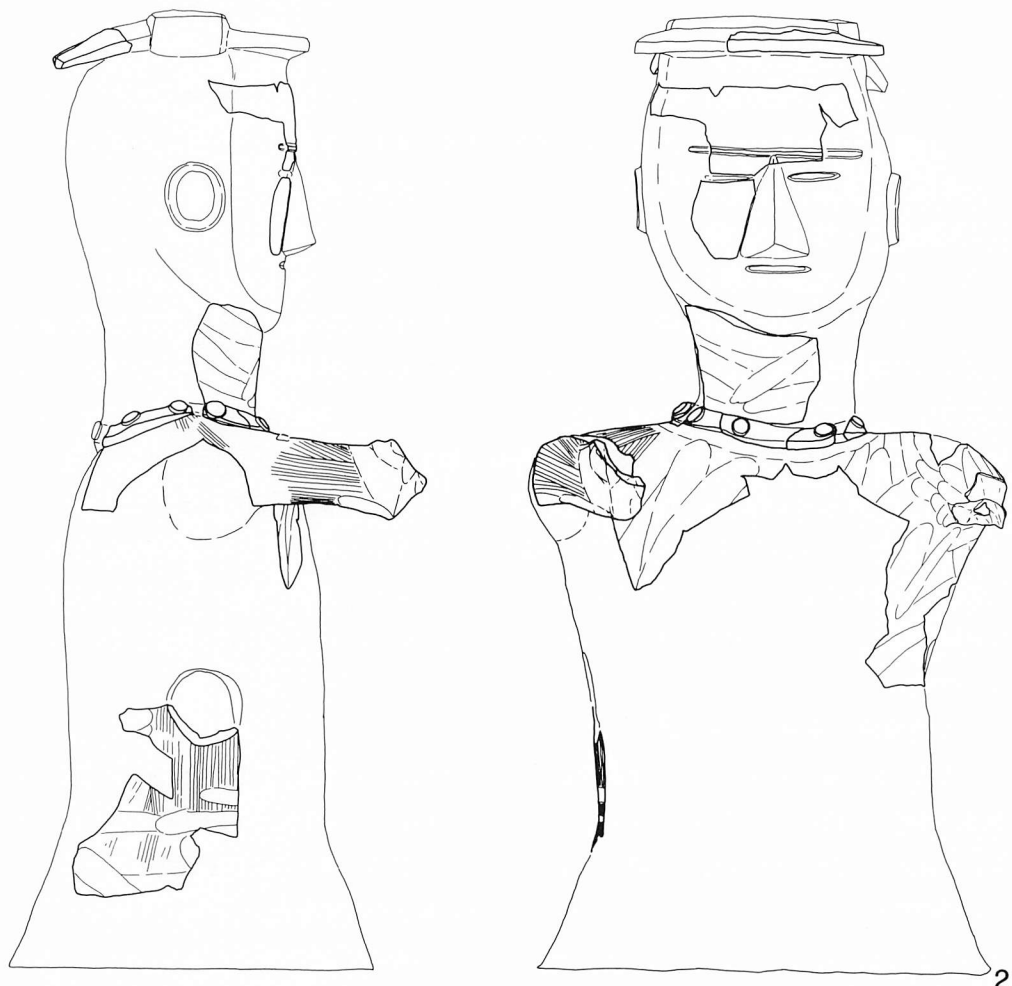
台部下半、上半身を欠損するが、現状での高さ60cmを測る。浅黄橙色（10YR8/3）を呈し、石英、チャート、角閃石、酸化鉄粒を含む。焼成はやや軟質である。6と同様に粘土板を重ねることによって草摺を表現しているが、6より薄い粘土板を四段に重ねる点で異なっている。下から二段目はヨコハケ（2.5cm/10本）、その他はナデを施している。胴部はタテハケ（2.3cm/10本）の後、横方面に沈線を巡らし、縦及び横方面に朱線を施すことによって、挂甲の小札を表現している。腰部には、腰帯として幅4cmの粘土板を貼り付けている。脚部は粘土紐を輪積みして製作しており、外面タテハケ（2.3cm/10本）、内面はナデを施し、足結などの表現はない。円筒形の台部のドーム天井に粘土板を貼り付けてやや内股の足を表現しているが、先端が欠損しているため履物の有無は不明である。また、草摺の上部が左右ともに欠損しているため、大刀などを佩していたかどうかは不明である。

8. 人物埴輪・盾持人（第7図）

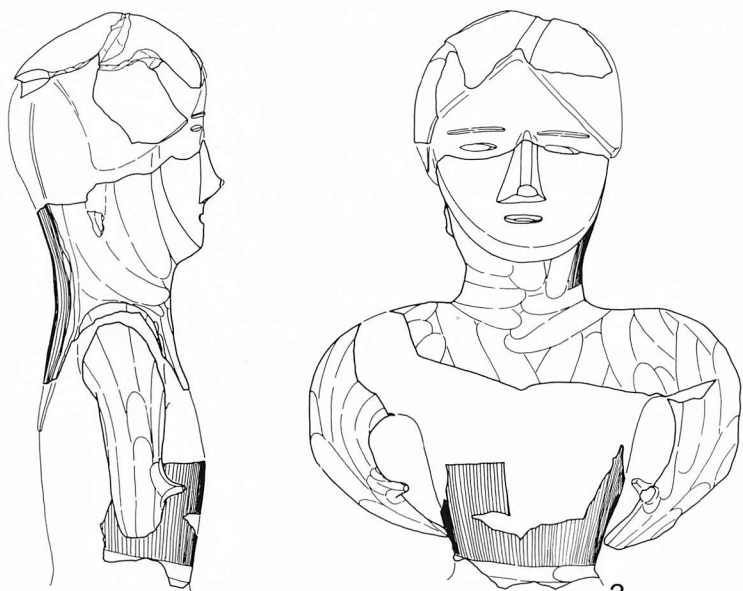
円筒部の最下段を欠損するが、復原高84.6cm、円筒部径18.6cm、盾部長36.5cm、幅27.8cmを測る。橙色（5YR7/6）を呈し、石英、チャート、長石、火山ガラス、酸化鉄粒の小礫を多く含み、全体として胎土はやや粗い。焼成は良好である。円筒部には、六条の断面がややつぶれたM字形の凸帯を貼り付ける。五条目からは内傾し、首部の最上凸帯に至る。三段目と六段目の側面には、円形の透孔を二個ずつ穿っている。円筒部及び首部、後頭部下半はタテハケ（2.2cm/10本）、盾部は緑辺部がナデ、その他はヨコ・タテハケ（2.2cm/10本）を施しているが、鋸歯文などの文様はない。盾部は、円筒部に縦長の粘土板を貼り付けて製作している。顎部は粘土板を、鼻は粘土塊を貼り付けて製作しており、ヘラ工具で目はやや下がりぎみに、口は水平に細く開けられている。眉は粘土を貼り付けて表現している。耳は円孔を穿ち、その下には耳環の剥がれた痕跡が確認できる。頭頂部には、所謂笄帽を付けているが、その装着方法は、粘土紐を輪積みして頭部を製作した後、頭頂部を塞がずに別作りの笄を置き、隙間に粘土を充填する。そして、接合部は丁寧にナデを施している。

この盾持人は、瓦塚古墳から出土している他の人物埴輪に比べ、顔のつくりや全体の大きさがかなり大柄である。盾持人のもつ辟邪という性格が、大きさに表されているといえよう。

（日高 慎）



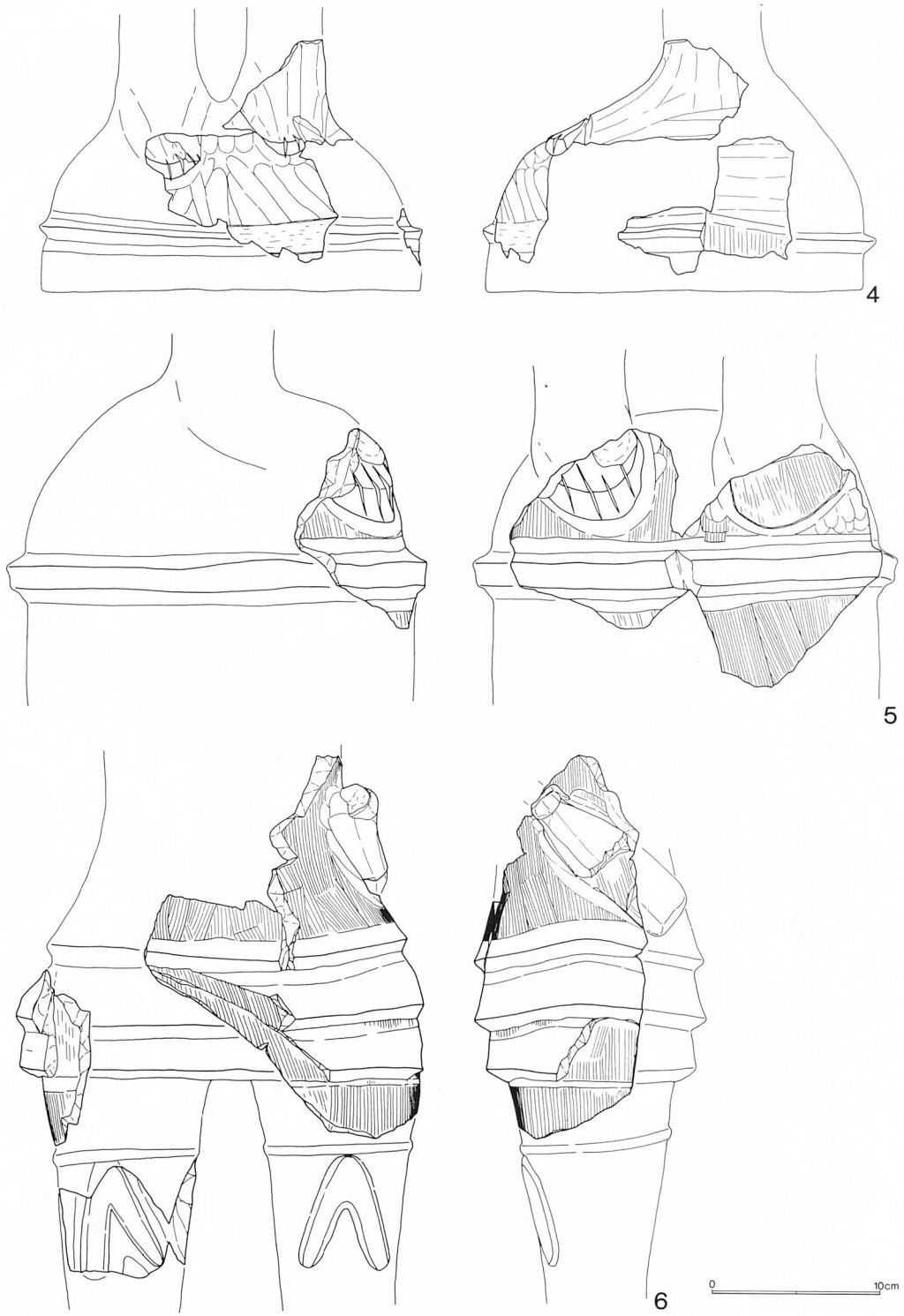
2



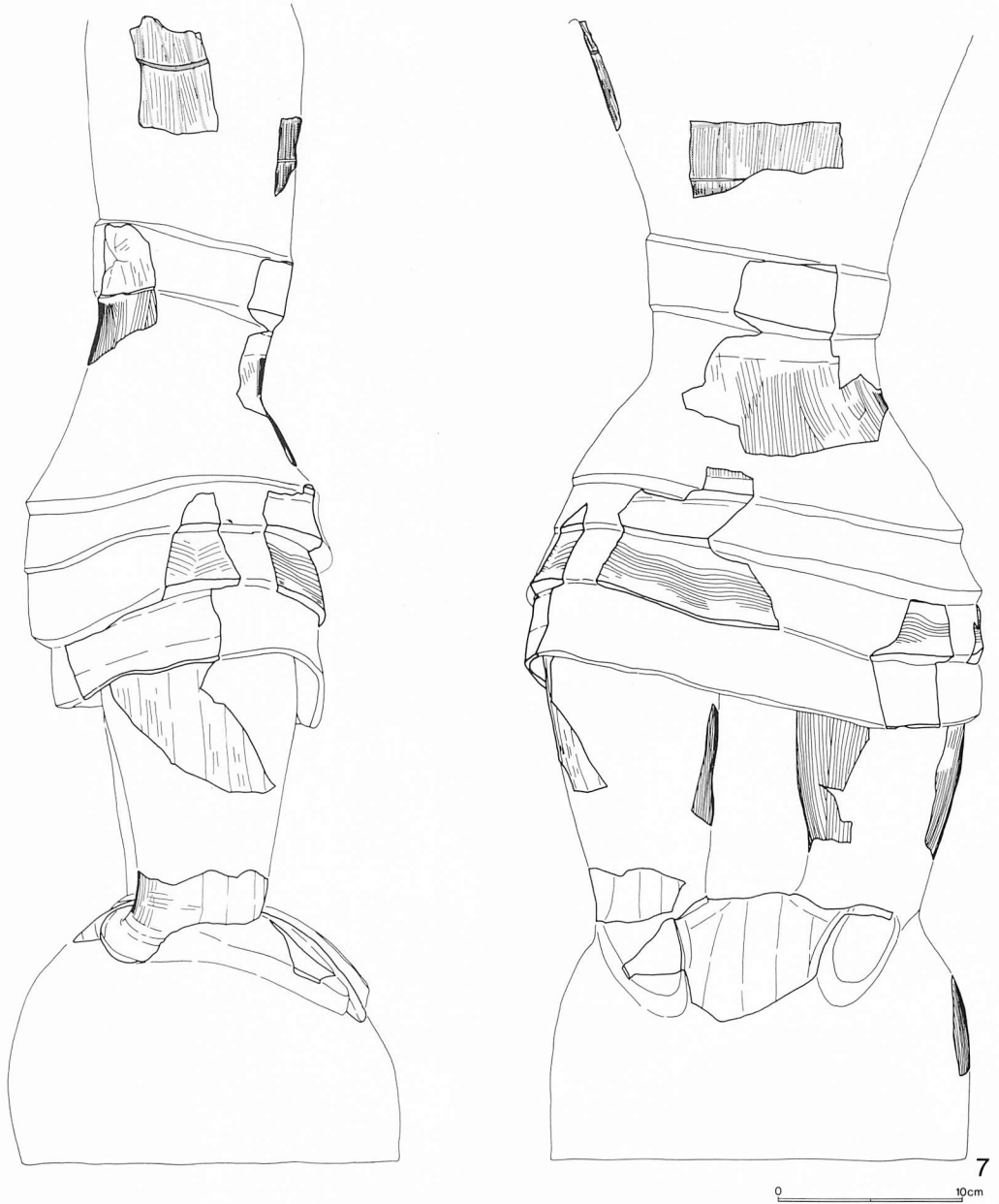
3

0 10cm

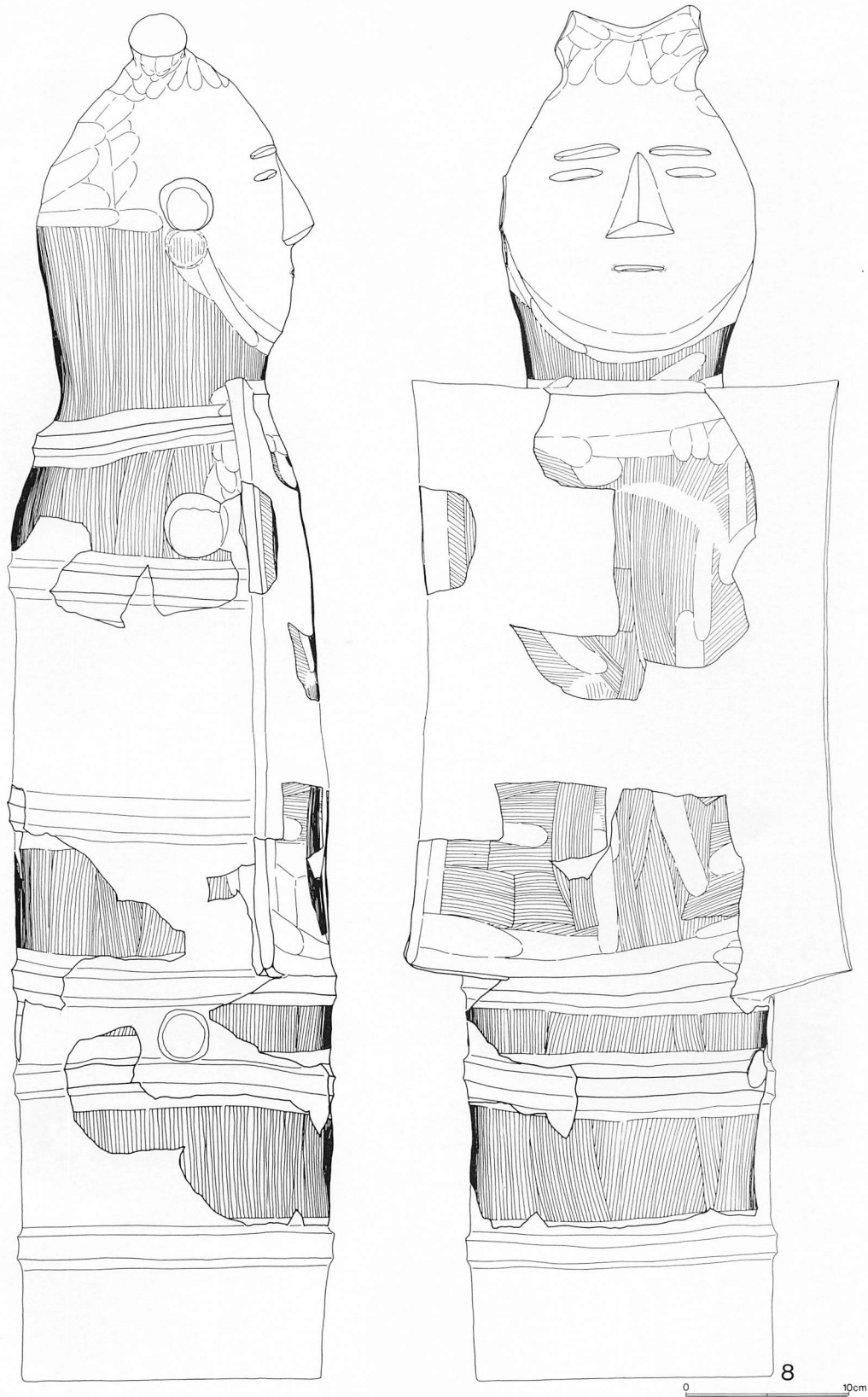
第4図 瓦塚古墳出土人物埴輪 (1/4)



第5図 瓦塚古墳出土人物埴輪 (1/4)



第6図 瓦塚古墳出土人物埴輪 (1/4)



第7図 瓦塚古墳出土人物埴輪 (1/4)



写真1

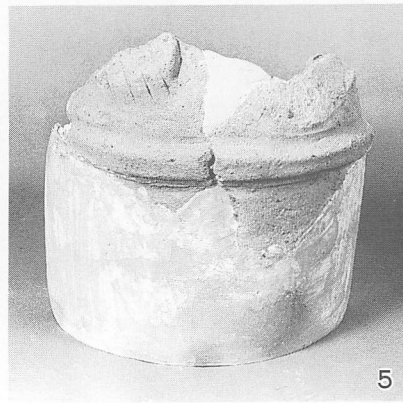
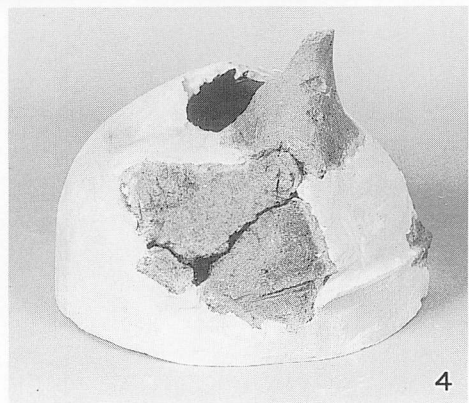
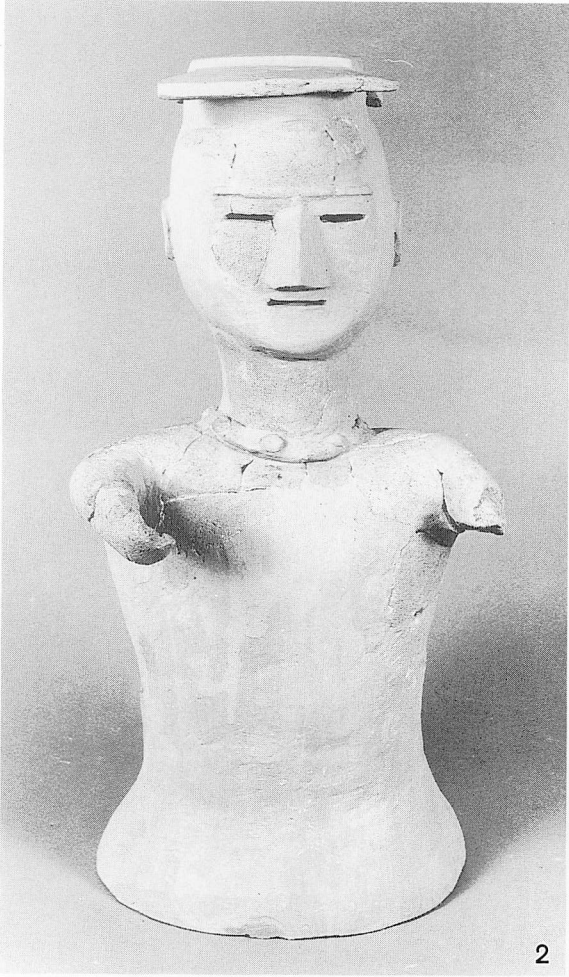
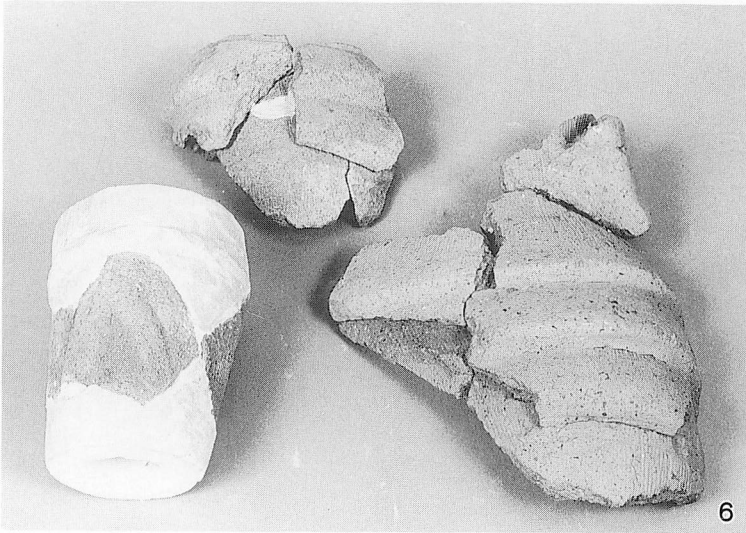


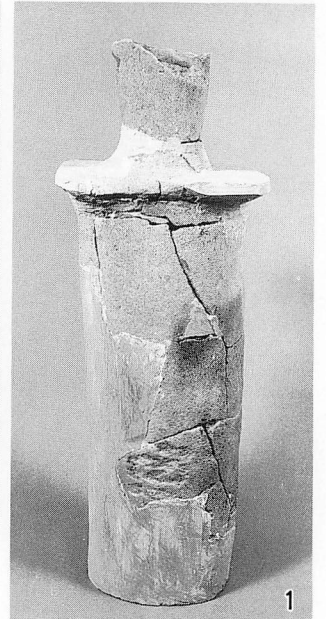
写真2



2



6



1

写真3

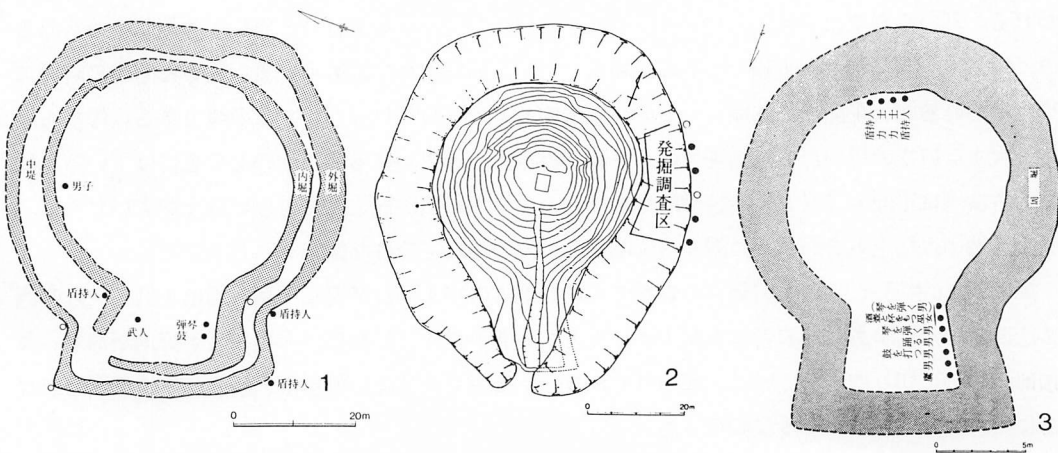
3 盾持人埴輪の検討

瓦塚古墳出土の盾持人埴輪は、同古墳出土の他の人物埴輪より格段に大きく製作されている点や、頭頂部に2個の突起をもつことに形態的な特徴がある。また、出土位置からみて、中堤の隅角部に単体で配置された可能性が高く、他の人物埴輪群とは異なった用いられ方がなされているようである。いくつかの事例をあげて、盾持人埴輪の配置の特性と分布や編年の位置づけについて検討してみたい。なお編年については若松の人物埴輪編年案（参考文献3）を用いる。

盾持人埴輪の配置のあり方

瓦塚古墳のような前方後円墳での事例は多くないが、いくつかの帆立貝式古墳で盾持人埴輪の配置が明らかにされているので紹介してみたい。埼玉県熊谷市の女塚1号墳は二重の周堀をもつ帆立貝式古墳であるが、盾持人埴輪はくびれ部に対応して内堀と外堀が屈曲する位置及び外堀の前方部隅角の外側に配置されていた。一方、弾琴や武人などの人物埴輪群は前方部の墳丘上に集中して配置されていた。埼玉県東松山市のおくま山古墳は馬蹄形の周堀をもつ帆立貝式古墳であるが、盾持人埴輪は周堀外の外堤上に4個体以上が配置されていたとみられる。福島県泉崎村の原山1号墳の場合は、丘陵の突端に築造された帆立貝式古墳だが、墓道を登りつめて墳丘が初めて目に入る正面（後円部）に盾持人と力士の埴輪が立てられていた。巫女や楽人などの人物埴輪群が集中的に配置されたのは前方部であり、両者は大きく離れている。

このような事例を参考にすると、盾持人埴輪は他の人物埴輪群とは切り離されて配置され、周堀の外側や、屈曲部、正面などに立てられる場合の多いことが知られる。この点で、瓦塚古墳の盾持人埴輪が中堤の隅角部に置かれたとみられるのは扱ひ方が共通している。東大阪市の西ノ辻遺跡の場合、古墳ではなく、古墳群の入口ともみられる谷に盾持人埴輪が置かれていたという。盾持人埴輪が一般の武人埴輪とは異なって、辟邪の性格を強く保有していたことを端的に示すものだろう。



第8図 盾持人埴輪の配置事例 1 女塚1号墳 2 おくま山古墳 3 原前1号墳

盾持人埴輪の分布と編年

盾持人埴輪は盾形埴輪に人物の頭部を付けたもので、手足の表現がないことを特徴としている。分布的には関東地方に集中する（第9図の7・9～11が該当）が、九州でも熊本県野津（8）、福岡県拝塚古墳（2）、同県塚堂古墳（3）、同県仙道古墳（12）など、かなりの分布が知られる。近畿地方では大阪府墓山古墳、西ノ辻遺跡、奈良県小墓古墳などから盾持人埴輪が出土しており、今後、資料が増加するものと思われる。また、人物埴輪の分布が希薄とされていた北陸地方でも、石川県狐塚古墳例（6）が古く出土している。北限は今のところ福島県の原山1号墳例（4）である。

編年的な検討では、盾持人埴輪は盾形埴輪に人頭を付けた最古の人物埴輪であり、大阪府はさみ山遺跡や墓山古墳から盾面の上に細い円筒の突出する盾形埴輪（1）が出土しており、別体式の胃か人頭を挿入したものではないかと推定される。墓山古墳からは人頭大を超える大型の顔面の破片も出土しており、盾持人の頭部となる可能性が高い。墓山古墳からは黒班の付く円筒埴輪（川西Ⅲ期）が出土しているので、5世紀前半代まで遡るとみられる。このように初期の盾持人埴輪は頭部が別体製作であった可能性が高く、極めて巨大な作品のあったことを特徴としてあげうる。

この別体式の頭部をもつ大型品に奈良県羽子田遺跡例（5）や群馬県塚廻り1号墳例（9）があり、後者からは人物埴輪第4期（6世紀中葉）まで存続したことが知られる。おそらく、大型品のため埴輪窯の天井の高さの制限上、別体式とせざるをえなかったのだろう。

一方、人物埴輪第1a期（巫女埴輪の出現以前）の盾持人埴輪は福岡県拝塚古墳（2）からも出土しているが、頭部は本体と一体に製作されている。盾は円筒の正面に線刻で表現されているだけで、ヒレ状の粘土板を加えていない。このため、まるで、コケシのような造形となっている。耳が通常の人物埴輪と異なって、団扇状に外側に向かって張り出しているのは、正面性の著しい埴輪であることに起因しているよう。

人物埴輪第2期（5世紀後葉）には塚堂古墳（3）、原山1号墳（4）、狐塚古墳（6）、埼玉稲荷山古墳（7）、野津（8）の出土例をあげうる。盾面に着目すると塚堂古墳例と原山1号墳例は綾杉文と鋸歯文が線刻されているのに対し、狐塚古墳例と稲荷山古墳例は無文であり、新しい要素かと思われる。耳の表現法は一般の人物埴輪と共通する環形のもが塚堂古墳と原山古墳例に認められるのに対して、横に張り出す扁平なものが稲荷山古墳、狐塚古墳に認められる。両者とも次の時期に受け継がれるが、正面性を強調したものが主流的である。被り物については多様である。塚堂古墳例は大きな脇立の付いた被り物を付け、野津例は革冑かと思われる頭巾状のものを付けている。稲荷山古墳例は正面で二又となる特徴的な被り物を付けているが冠と断定しないほうがよいだろう。原山古墳例は粘土板を頭頂部に置き、両脇を下に丸め込んで特殊な結髪を示している。

第3期（5世紀末～6世紀前葉）の資料で、近畿地方の出土品に奈良県小墓古墳出土例、大阪府西ノ辻遺跡出土例がある。前者は人頭大より大きな頭部が付き、顔面には入墨を表す線刻がある。頭頂部は斜めに切り取られていて、塞がれていない。後者も頭頂部の処理や、盾面が無文である点などに共通性がありシンプルな製作である。



第9図 盾持人埴輪集成 1はさみ山遺跡 2拝塚古墳 3塚堂古墳 4原山1号墳 5羽子田
6狐塚古墳 7稻荷山古墳 8野津 9塚廻り1号墳 10舟塚古墳 11竜角寺101号墳 12仙道古墳

一方、関東地方では、群馬県保渡田Ⅶ遺跡から小型の盾持人が8体ほど出土しているが、頭頂部に角状の突起が2本ある。このほか、埼玉県おくま山古墳と女塚1号墳からも角状突起を付けた盾持人が出土している。これについては、かつて稚子髻と見られたことがあり、中国の俑などに認められる双髻と関係する可能性も考えられた。しかし、埼玉県上中条出土の男子頭部（関西大学蔵）のように、明らかに帽子とみられる装飾の表現されたものがあることからすれば、やはり、丸帽を、笄を用いて頭頂部で留めた笄帽とみてよいだろう。この時期以降、関東地方では笄帽を被る盾持人の例が増加し、あたかも笄帽が盾持人のトレードマークだったかの感をいだかせる。

ところで、おくま山古墳の4体の盾持人は、いずれも顎鬚をたくわえ、額が狭く、猿面にも似て、独特な雰囲気をもっている。また、この内1体については口が兔唇に製作されている。

第4期（6世紀中葉）の盾持人埴輪には群馬県塚廻り1号墳例（9）、茨城県舟塚古墳例（10）、千葉県竜角寺101号墳例（11）、福岡県仙道古墳例（12）をあげることができる。盾面の文様は簡単な鋸歯文が主流となっており、退化的特徴とみられよう。被り物については多様性が認められる。面相については、耳が突出する点をのぞけば、通常の人物埴輪と異なるものが多い。しかし、塚廻り1号墳例は前述したように、大型の別体製作技法によるものであり、顔面に入墨を施す不気味な面相や頭頂部の尖る被り物など異色の存在である。埴輪の終末期となる第5期（6世紀後葉）には盾持人埴輪は極端に減少するようであり、良好な資料がない。

以上、概観してきた盾持人の変遷からは、①盾持人は他の人物埴輪より大振りに製作される傾向が強いこと。②正面性が著しく、耳が横に張り出すものが主流であること。③入れ墨を施すものがあること。④容貌魁偉なものがあること。⑤盾面の装飾は時間的経過とともに簡略化の流れが追えること。などを指摘することができよう。このことは盾持人埴輪の配置の特徴ともあわせて、塞の役割、辟邪の性格を色濃く反映したものと考えられる。瓦塚古墳の盾持人埴輪は①については意識されて製作されているものの、耳が簡略化され円孔となっている点、盾が無文である点に新しい要素がうかがわれる。そして何よりも容貌が隠やかである点では、盾持人に与えられていた呪術性の減退が看取されるように思われる。

（若松 良一）

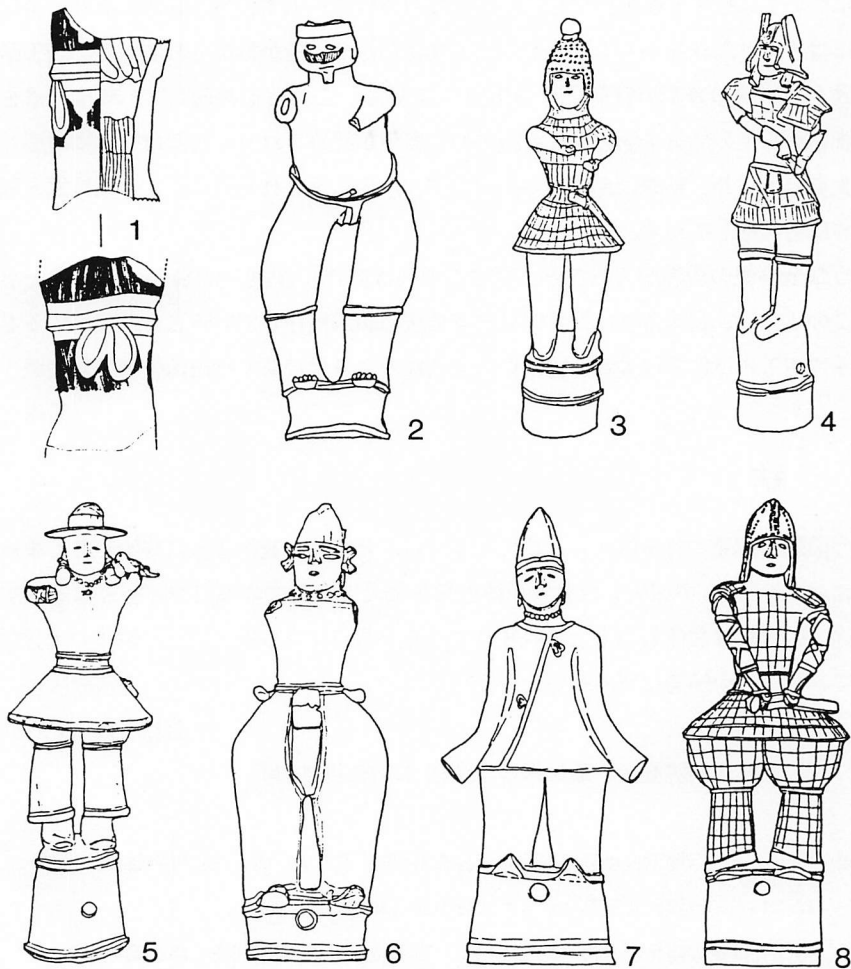
4 全身像と台部の検討

今回資料報告した全身像は3個体分であり、内2個体は胴部が遺存し、草摺が表現されていることから武人像とみられた。台部に着目してみると、いずれも直径23cm前後の低い円筒で、天井部がドーム状をなしている。このため、足の部分は地なりに下がり不自然な印象を与える。資料5の台部の足に注目すると、線刻で指の表現がなされている。これは資料6の武人体部と同一個体である可能性が高いので、裸足の武人となるものかも知れない。武人は必ず靴をはき、裸足なら力士像となるなどという思い込みがきわめて危険なことを教えられた。

人物の腰の部分に着目してみると、資料6では3段、資料7では4段下りの草摺が粘土帯を実際に重ね合わせて写実的に表現されている。脚部はこの草摺の内側に半ばかくれているので、露出しているのは、およそ膝から下ということになる。資料6の場合、膝の付近に脚結の紐が表現され、正面

には、その結び緒が粘土紐によって示されている。これらの立像を観察しての印象は、小型で脚部が細いということである。一般に、全身像が大型化する段階では、脚結より上部を球形にふくらませ、草摺や衣服の裾を異常に幅広く誇張表現することが多いので、特に瓦塚古墳の全身像との差異は大きく感じられる。

第10図に各種の全身像を例示したので、全身像の表現法と台部の形態について、編年的に概観しておくことにしよう。人物埴輪の出現期（第1期）には軽装の武人が半身像として造形されるが、甲冑を着用する武人像は登場しておらず、基本的には甲冑形埴輪と呼ばれる器財形埴輪が製作された。全身像の登場時期は第2期（5世紀後葉）であり、関東地方では、埼玉稲荷山古墳から脚結の付く脚部（第10図1）が出土している。これには眉庇付冑を付けた大型の頭部と横矧板鍔留式短甲を付けた胴部を伴う可能性があり、等身大に迫るものとなるかも知れない。近畿地方では奈良県四条古墳から、円筒形の台部に靴と脛当てを着用した脚部の付く資料が出土しているが、革甲を付け、冑は被っていない可能性がある。



第10図 全身像と台部 1 稲荷山古墳 2 井辺八幡山古墳 3 舟塚古墳 4 上芝古墳
5 オクマン山古墳 6 酒巻14号墳 7 山倉1号墳 8 生出塚埴輪窯跡

第3期（5世紀末～6世紀前葉）になると全身像として造形される人物埴輪の割合が急激に増加する。近畿地方では、大阪府今城塚古墳出土の武人像が挂甲を着用した全身像として代表的な存在である。また、和歌山県井辺八幡山古墳では革甲や挂甲を着用した武人像のほか、力士像（2）が全身像として製作されているが、台部は円筒形で総じて低いものが伴う。

第4期（6世紀中葉）には、関東地方では挂甲と衝角付冑を着用した全身像が盛んに製作された。群馬県上芝古墳出土品（4）は該期の代表例であり、右手を大刀の柄にかけ、今にも抜刀しようとする様が造形されている。脚部に注目すると、細い円筒状に制作され、膝から上の部分も特に太くは表現されていない。台部は円筒形で天井がドーム状になっているため、靴先が地なりに下がっている。同様の特徴をもつ武人像に栃木県中山古墳出土品、福島県神谷作101号墳出土品などがある。茨城県舟塚古墳出土品（3）も基本的には共通した表現法をとっている。

第5期（6世紀後葉）になると近畿地方では、ほとんど人物埴輪が製作されなくなるが、関東地方では、人物埴輪の供給対象古墳が増加し、小型の円墳などにも全身像の立てられる場合が出てくる。武人像については挂甲と衝角付冑を着用し、抜刀の姿勢を示す大型の立像が盛んに製作された。特に群馬県にはすぐれた作品が多く、一定の工人集団からの供給が推定されている。埼玉県では生田塚埴輪窯跡から同様の表現の資料（6）が出土している。これらは共通して、草摺の裾を大きく開き、禪の脚結から上の部分を膨らませる誇張的な表現が認められる。台部はこれに対応して横長の楕円筒の大型品となり、靴先は台部から突出して、水平に示されている。この点は武人以外の全身像（5～7）にも共通している。

以上のような全身像の変遷からみると、瓦塚古墳例は第4期の典型的な資料ということができそうである。このことは、瓦塚古墳に伝統的な中空技法の腕が残存していることと整合するものであろう。ちなみに埼玉古墳群では愛宕山古墳からも同様の全身像台部（行田市教育委員会蔵）が出土している。

（若松 良一）

5 小 結

「形象埴輪の配置と復原される儀礼」と銘打ちながら、今回は、資料報告に終始してしまった。しかし、次回には『第8集』で報告した動物埴輪群像を加えて全体像の検討が可能となるはずである。また、復原途上の貴重な個体もいくつか残されている。原点に立ち帰って、各個体の十分なる観察を基礎として、全体像の構築に努めたいと思う。

（若松 良一・日高 慎）

* 日高 慎 筑波大学大学院歴史人類学系博士課程（本館臨時職員）

参考文献

1. 杉崎 茂樹・若松 良一『埼玉古墳群発掘調査報告書第4集瓦塚古墳』埼玉県教育委員会 1986
2. 若松 良一『はにわ人の世界』埼玉県立さきたま資料館 1988
3. 若松 良一「埴輪の種類と編年—人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』第9巻 雄山閣 1992
4. 橋本 博文「関東地方の埴輪」『季刊考古学』第20号 雄山閣 1987
5. 辰巳 和弘『高殿の考古学』白水社 1990

古墳詳細分布調査 試掘・測量調査の報告

県立さきたま資料館・学芸部

埼玉県教育委員会では、文化庁の国庫補助金の交付を受けて埼玉県内所在古墳詳細分布調査を平成元年度から実施しており、県内に所在する古墳の現況を把握するための概況調査による古墳カード作成と、概況調査を実施した古墳の中から、その実態は不明であるが重要と思われる古墳を地域毎に選定し、試掘・測量調査を実施している。調査は平成元年度から5年までで、元年度は、入間・比企郡市、2年度は秩父・児玉郡市、3年度は北埼玉・南埼玉・北葛飾郡市を対象に実施した。平成4年度は、北足立・大里郡市、5年度は、全県補足調査と報告書の作成を予定している。ここでは、平成元年度から3年度までに行った、試掘・測量調査の概要を報告する。なお、この報告は、平成3年3月と平成4年3月に「古墳詳細分布調査概報1, 2」として掲載したものをまとめたものである事をお断りする。

1 平成元年度試掘・測量調査について

平成元年度の調査は、各地域の代表的な前方後円墳の雷電塚古墳、大類2号墳、天神山古墳、墳形から古式と思われる根岸稻荷神社古墳、山の根古墳、その重要性が判明しつつある天神山横穴墓群を対象とした。試掘・測量調査は、平板測量を行って、墳形を確認すると共に、遺構・遺物の検出のために数本のトレンチを設定して進めた。

(1) 雷電塚古墳

所在地 坂戸市大字小沼269

立地 雷電塚古墳は、東武東上線坂戸駅の東方約2.7kmの、標高18mの坂戸台地の末端に位置する。台地の縁からはやや奥まっているが、北側には越辺川の沖積地を望む。前方部から約10m程のところにも痕跡程度の古墳があるほか、周囲には4基の古墳があり、雷電塚古墳群と呼ばれている。

現況 この地域の代表的な前方後円墳として、昭和31年に県指定史跡となった。墳丘の規模は全長47m、前方幅23m、後円部の直径25.5m、高さは前方部3.25m、後円部4.5mである。後円部には小祠があるが、東側は山林で、保存状態は良い。墳丘西側の裾は、畑地との境となる深い根切り溝で削られていた。

調査の概要 調査は墳丘東側くびれ部に第1トレンチ、前方部に第2トレンチを設定して進めた。第1トレンチは幅2m、長さ11.5mで、幅9.8mの周堀が検出された。墳丘裾は垂直に近い立ち上がりであったが、周堀外側の傾斜はやや緩かった。第2トレンチで検出された周堀は、幅が狭く、5.5mであった。深さも浅く、墳丘側で1.2mであった外側の立ち上がりの傾斜は、くびれ部に比べてもさらに緩かった。この結果、周堀の形態は盾形とならず、墳丘に沿うように同じ幅でめぐっている可能性が高い。発見された遺物は、多量の円筒埴輪のほか、朝顔形埴輪片、形象埴輪片、須恵器片がある。出土量はくびれ部が圧倒的に多かった。築造年代は墳形や出土した埴輪から6世紀中頃と推定される。

(谷井)

(2) 大類2号墳

所在地 入間郡毛呂山町大字川角字塚原2219

立地 越辺川の右岸の坂戸台地にある。台地の西側には5m下がった段丘が広がる。台地は広い平坦地が続き、毛呂山町には2基の前方後円墳を中心とした39基の大類古墳群、隣接した坂戸市域には3基の前方後円墳を含む13基からなる塚原古墳群がある。

現況 古墳の周囲は全て畑地で、墳丘の周りは開墾され、前方部と後円部の中心を残すのみで、本来の形が想像できないほど変形していた。現況の墳丘の長さは26m、幅8.5m、後円部の高さ2.2mである。墳丘には多量の川原石が積まれていることから、葺石で覆われていた可能性が高い。

調査の概要 東西に長い墳丘に対して、墳丘東端で南方方向に第1トレンチ、南側くびれ部に第2トレンチ、北側に第3トレンチを設けた。幅2m、長さ11mの第1トレンチでは幅2.6mの周堀が検出された。トレンチの端では隣接する円墳の周堀と思われる溝も見つかっている。第2トレンチでは基盤がローム層ではなく、暗褐色土のため、周堀ははっきりしなかったが、土層断面から3m程が予想された。第3トレンチでは掘り込みが最も深く、調査範囲内では周堀外側の立ち上がりが検出できなかったことから、幅は7.5m以上である。発見された遺物は第1トレンチで土師器杯が出土したほか、第3トレンチを中心に埴輪が多量に出土しているほか、須恵器大甕片等もみられた。古墳の築造年代は土師器杯の特徴から6世紀前半から中ばと考えられる。(谷井)

(3) 天神山古墳

所在地 東松山市柏崎134-12

立地 天神山古墳は松山台地が東方に向かって長く張り出す舌状台地上に占地し、北側には東流する市の川と沖積地が迫っている。古墳周辺の標高は26mである。周囲には全長62mの前方後円墳である、おくま山古墳のほか、15基の円墳が現存しており、柏崎古墳群と呼ばれているが、消滅した古墳も多い。

現況 墳丘の東半が削平され、住宅が建てられている。主軸はほぼ南北方向で、全長約57mを測り、北側が高く、南側は低平で、くびれる部分があるため、前方後円墳とみられている。現状での墳丘の高さは、約4mであるが、近所の人の話では、かつては倍くらいの高さがあったという。

調査の概要 調査は西側の平坦地に設けた4本のトレンチのうち、第3トレンチと第4トレンチで周堀の一部が検出され、外側の立ち上がりラインが内側に直角に近い状態で屈曲することが明らかとなった。このため、天神山古墳の周堀は墳丘と相似形に掘られているとみられ、ほぼ同規模の前方後円墳であるおくま山古墳の馬蹄形周堀とは相違することから、前方後方墳であった可能性がありうる。

今回の調査では、墳裾ライン検出することができなかったため、墳形と規模を確定するには至らなかった。今後の範囲確認調査の継続が望まれる。発見された遺物は少量であり、縄文土器片、五領式の土師器壺口縁部片、鬼高式のいわゆる比企型土師器坏片があるが、埴輪片は検出されなかった。古墳の築造時期については、昭和の初期、村人たちの手によって土採りされた際に石室状の遺構が認められ、仿製内行花文鏡と玉類などが出土しており、今回、埴輪の検出がなく、五領式土器(墳丘上からも広く表採できる)の大形破片が出土したことから、4世紀まで遡る可能性がある。(若松)

(4) 根岸稲荷神社古墳

所在地 東松山市大字古凍字根岸1156ほか

立地 根岸稲荷神社古墳は、東松山市南東部の新江川を望む台地上にあり、墳丘裾部の標高は19.4～19.6mである。対岸には円墳と帆立貝式古墳を含む計22基（昭和37年調査）からなる古凍古墳群が分布している。

現況 古墳の高さは1.6mで、平面形は南北15m、東西15mの正方形である。墳頂部には稲荷社が祀られ、南側にむけて参道が、墳丘を若干削りこむ状態でのびている。また東側には、墳裾に造り出し状の盛り上がりが見られる。その上に東側から通ずる旧参道の痕跡が残っている。墳丘の西側は、墳裾ギリギリのところまで、新江川の河川改修工事で削られ、断崖状となっている。また墳丘の東側も比高差5～6mの崖となっており、崖下には民家がある。

調査の概要 調査は墳丘から周囲の平坦地にかけるかたちで北側、東側、南側の3か所にトレンチを設定し、古墳の形状と規模を確認することに努めた。墳丘南側の第1トレンチは幅1.5m、長さ11.5mで、墳裾から4mほど離れて周堀が検出された。周堀は上幅3.5m、下幅2.3m、ローム面からの深さは0.8mである。墳丘北側の第2トレンチは、幅1.5m、長さ10.5mで、墳裾から2.3m離れて周堀が検出された。周堀は上幅5m、下幅3.5m、ローム面からの深さは0.9mである。墳丘東側の第3トレンチは、造り出し状のふくらみを調査する目的で設定した。幅1m、長さ3.5mである。ここでは、くびれ部が明瞭に検出された。

根岸稲荷神社古墳は調査の結果、小型の前方後方墳と推定でき、後方部は20×20m程度の規模である。前方部先端は不明であるが、くびれ部幅7m、長さ5m以上の規模となろう。周堀からの出土遺物には、吉ヶ谷式系の壺1と五領式の壺2・3とがあり、1・3は焼成後に底部穿孔されている。

(若松)

(5) 天神山横穴墓群

所在地 比企郡滑川町大字福田字中在家3218-3ほか

立地 天神山横穴墓群は荒川大橋の南方約2kmの熊谷東松山有料道路沿いに位置し、谷田を臨む低位丘陵の南西斜面に分布している。丘陵麓の標高は52mで、最高所の標高は68.9mである。

現況 調査時での開口横穴は1基で、玄室の規模が大きく、棺台が設けられている。これを1号横穴墓と呼称することにした。1号横穴墓の南東側は比較的丘陵の傾斜がゆるやかで、表面が土壌に覆われているが、北西側は急で、砂質泥岩の基盤層の露出する部分も認められた。

調査の概要 当初、新規の横穴墓を発見すべく、1号横穴墓の南東傾斜面の中腹に幅2m、長さ15mのトレンチを設定したが砂質泥岩の基盤層の検出にとどまり、横穴は発見されなかった。このため、かつて開口していたが、戦後埋めもどした横穴があるとの地元の人の情報から、1号横穴の北西約16mの丘陵麓部の調査を実施した。その結果、比較的小規模な横穴墓が1基検出され、これを2号横穴墓と呼んだ。玄室の平面形は胴張り長方形で、幅1.64m、長さ1.98mで、天井部はカマボコ形に作られていた。玄門部には閉塞石をはめ込んだと推定される溝が切られていた。羨道部の平面形は、いったんくびれてから開く形態をとり、最も狭まった部分の幅0.86m、長さ1mである。玄室の中

中央から羨道部の中軸線上には水抜き溝が掘られ、玄室と羨道の床面も外側に向けて傾斜をもたせる配慮がみられた。1号横穴は、玄室内に土砂が再推積していたため、清掃し、実測図を作成することとし、羨道部発掘調査を実施した。玄室の平面形は胴張り方形で、幅2.44m、長さ2.44mを測り、玄門側の壁面は内彎している。玄室の左側壁に接して、掘り残した棺台が設けられていた。玄室の天井部は2号横穴墓と異なり、アーチ形で、中央部が最も高く、1.56mある。羨道部は下端幅0.44mと狭く、中心に排水路が掘られている。羨道部の前方には、南側に屈曲して墓道が設けられており、両者の境界には閉塞石がわずかに残っていた。3号横穴は、2号横穴の北西10mの地点で閉塞された状態が確認できたが、今後の保存を考えて、これ以上の調査をひかえることとした。1・2号横穴墓は盗掘されていたため玄室内の遺物は皆無であったが、1号横穴墓の閉塞石付近から須恵器大甕の小片が1点検出された。

(若松)

(6) 山の根古墳

所在地 比企郡吉見町大字久米田五の耕地746ほか

立地 山の根古墳は吉見丘陵から派生する尾根上にあり、尾根の先端に前方部を向けて築かれている。山の根古墳の北西35mには一辺25mの方墳がある。

現況 保存状態が良好で、前方後方形の墳形をよくとどめている。谷側にあたる後方部東墳丘部は自然の傾斜面を削り出しているほか、前方部も尾根先端の地形を利用している。

調査の概要 後方部の周囲に4か所、くびれ部に1か所、前方部に2か所のトレンチを設け、墳丘及び周堀の確認を行った。その結果、谷と反対側の平坦面にも周堀はなく、墳丘の盛土を得るために白色粘土層まで削り出した地山整形面であることが明らかとなった。西側のくびれ部に設けた第7トレンチでは、後方部の墳丘裾ラインが直線的に検出され、これに沿ってテラス状の平坦面があった。この部分から墳丘外の地山面にかけて、かなりの遺物が検出された。主なものに高坏、壺の下半部、台付甕などがある。

調査は不十分であるが現段階での規模は、主軸長54.8m、後方部長33.6m、同幅26.2m、前方部長21.2m、同幅19.2mである。墳丘の高さは傾斜面に築造されているため基底部から計ると、後方部は3m、前方部は1.9mとなる。古墳の築造年代は、くびれ部から出土した高坏が、深い坏部と、6個の円孔をもつ大きく開く脚部などから、五領式の中でも新しくならず、4世紀代が考えられる。

(若松)

2 平成2年度試掘・測量調査について

平成2年度の調査は、規模が大きい内容の不明な、狐塚古墳、牧林古墳、長沖157号墳、白岩銚子塚古墳、秩父郡市で唯一、埴輪をもつとされる天神塚古墳を対象とした。試掘・測量調査は、平板測量による墳形、規模の確認と、数本のトレンチによる遺構、遺物の検出を行った。

(1) 狐塚古墳

所在地 秩父市大字影森字下原

立地 荒川右岸の河岸段丘の古墳で、河岸からは約100m奥まっている。標高242mで、周囲には平坦地が広がる。荒川沿いの秩父の谷筋では最も西端の古墳だが、周囲に古墳は存在しない。しかし、周囲で土器片や石斧等が拾えるものの古墳時代に関わる遺物はまったく採集されておらず、詳

細は不明とされていた。

現況 墳丘の周囲にも宅地化が及び西から東側の墳丘裾まで宅地となっている。墳丘頂部に稲荷社が祀られ、若干削平されているが、保存状態は良い。最も崩れが大きいのは南東隅から東辺で、動物の巣やむろが掘られていた。北東隅、南西隅には本来の形がうかがえた。各辺とも直線ぎみであり、一辺が24mの方形の墳丘と思われる。墳丘の傾斜は下半が急傾斜、上半がやや緩やかになるが、通常の高墳に比べれば、傾斜がきついといえよう。

調査の概要 調査は東辺に直交して2本のトレンチ、南辺に1本のトレンチを設けて進めたが、いずれのトレンチからも周堀は検出されなかった。そこで、第1トレンチを墳丘よりに延長して調査を進めたところ、現墳丘の裾から若干入った位置に0.5mほどの高さで乱雑に積み上げられた石積み遺構がみられた。石積みは旧地表と思われる部分からであった。この部分は稲荷社の参道にあたり、崩れも著しいことから補強のために築かれた可能性もある。(谷井)

(2) 天神塚古墳

所在地 秩父郡皆野町大字金崎字岩下

立地 天神塚古墳は親鼻橋のたもとから国神方面にぬける県道沿いにあり、隣接して金崎神社が鎮座する。地形的には、荒川の左岸、宝登山の南西方向に延びる山地下に開けた河岸段丘に位置している。

現況 墳麓は三方を宅地や畑で削られ、四角形に変形しており、周囲には石垣が組まれていた。墳頂部には大東亜戦争忠魂碑と書かれた石碑が建てられているが、直径のわりに低墳丘であり、土採りされている可能性がある。主体部は結晶片岩を用いた短冊形の横穴式石室で、南西に開口している。天神塚古墳の北東300mの地点には、やはり横穴式石室の開口する大塚3号墳がある。これらは秩父地方の代表的古墳群として、天神塚古墳を含めて4基が県指定史跡となっている。

調査の概要 墳丘の周囲に3本のトレンチを設け、墳形と周堀の有無の確認に努めた。周堀は保存状態が悪かったが、主に土層断面を細かく検討すると、下端が幅2m前後で巡ることが明らかになった。墳形は円墳とみられ、復原直径は15.6mとなる。墳丘は土によって築成されているが、10～30cm程度の大きさの片岩を大量に含んでいた。また、墳丘東側に設けた第2トレンチでは墳丘裾部の保存状態が良く、片岩を用いた貼り石が残っていた。出土遺物には円筒埴輪片と人物埴輪の腕の破片があるが、原位置での出土はなかった。天神塚古墳の築造年代は大塚3号墳などの胴張式に先行する短冊形の石室形態と円筒埴輪の特徴から、6世紀後半と推定される。現在のところ、秩父郡下で埴輪をもつことが確かな唯一の古墳である。(若松)

(3) 牧林古墳

所在地 吉田町大字下吉田字小暮3307

立地 赤平川左岸の河川段丘上にあり、赤平川の支流、土橋沢右岸にあり、古墳は段丘崖に面している。下吉田地内は、この古墳の北西に芦田古墳群、北東に取方古墳群があるが、当古墳はこれらの古墳群とは離れて存在しており、近くは、南西100mに、行人塚古墳があるのみである。ただ古墳に関係する遺物はなく、詳細は不明であった。

現況 墳丘の周囲は、上水を利用した水田と、桑畑となっている。また、墳丘上はかつて雑木林

であったが、調査時伐採されていた。墳丘の頂上部には、かつて浅間社が祀られていた。墳頂南西部には参道上の窪みがみられた。裾部は畑地として利用されたため、方形状を呈していた。

調査の概要 調査は西辺、北辺、北東隅に3本のトレンチを設定して行ったが、周堀は検出できず、墳裾と、粘土層まで削られた平坦面が確認された。墳丘は粘土と茶褐色土で互層に版築されていた。規模は墳裾で長径約28m程をもつと思われる。また、表面上の精査では、遺物、主体部等に関する手がかりは得られなかった。(大和)

(4) 長沖157号墳

所在地 児玉郡児玉町大字長沖字金屋885-1

立地 長沖古墳群は児玉丘陵の北側、身馴川の左岸の台地沿いに分布している。身馴川沿いの南北500m、東西1500mの範囲に157基の古墳が密集している。157号墳は古墳の密集した台地とは浅い谷を隔てた奥の台地にある。古墳は舌状台地の先端近くの馬の背部分の標高約120mのところ築かれていた。

現況 墳丘東側の裾近くまで宅地造成による削平が行われているが、墳丘部分はほぼ残っていた。墳頂部はかつて稲荷社があったためか、平坦であるが、本来の墳頂を均した程度であろう。測量図に示すように、墳丘全体ではほぼ原形を残し、西側及び南側の墳丘裾では周堀の跡と思われる窪みも見られた。南側墳丘下半部が平坦化され、等高線が乱れているが、稲荷社に登る参道のため変形されたものである。

調査の概況 調査は墳丘の南の窪みに第1トレンチ、西の窪みに第2トレンチを設けて進めた。幅2m、長さ9.6mの第1トレンチでは原墳丘裾からはじまる幅6mの周堀が検出された。長さ10mの第2トレンチでは墳丘よりでは傾斜の緩い平坦面に続いて幅7mの周堀が検出された。第1トレンチに比べ、やや幅広く、深かった。墳丘よりで見つかった平坦面が全体にめぐっている可能性がある。墳丘南西側は平坦化され等高線が乱れていたため、張り出し部の有無を確認するため、第3トレンチを入れた。調査結果では、東よりの部分がブリッジ状にやや高い堀底が確認され、円墳の可能性が高くなった。墳丘の規模は測量図や2本のトレンチの調査結果から直径約32mと推定される。

出土遺物は、第2トレンチを中心に、黒斑のある横ハケの施された埴輪が検出された。長沖古墳群ではいくつかの古墳で発見されており、築造年代は5世紀前半を中心とした年代が考えられよう。

(谷井)

(5) 白岩銚子塚古墳

所在地 児玉郡神川町大字新里字白岩

立地 銚子塚古墳は児玉丘陵の一部を形成する標高133mの白岩丘陵上にある前方後円墳で、丘陵頂部付近の鞍部に占地している。周囲には4基の小型円墳が散存しており、白岩古墳群と総称されている。

現況 墳丘上は山林となっており、保存は比較的良好であるが、後円部の南西側に大規模な盗掘堀があり、前方部墳頂付近にも椎茸栽培用の穴がある。盗掘堀の付近には、石室の用材とみられる大きな礫が転がっていた。墳丘の周囲には、周堀の痕跡が部分的に残り、特に前方部の北西側と後円部の南西側に顕著にみられる。

調査の概況 墳丘の周囲に5本のトレンチを設け、墳丘裾部と周堀の検出に努めた。後円部の北側に設定した第1トレンチでは、旧表土層とローム地山層を掘削した墳丘裾部が検出された。周堀は上端幅2.7m、深さ0.3mで、覆土中から埴輪片とともに、墳丘から転落した葺石が出土した。周堀の1.5m外側には幅4m程の堀があり、外堀の可能性がある。墳丘北東側のくびれ部に設定した第2トレンチでは、墳丘裾部は削平されていたが、周堀の外側の立ち上がり部も検出されなかった。地山面が外側に傾斜することから、この部分には周堀のなかった可能性がある。前方部先端から外側に向けて設定した第3トレンチでは、墳丘裾部は墳麓の外側2.5mの位置で検出された。周堀の規模は広く、上端幅8.2m、深さ0.6mである。覆土中には円筒埴輪片のほかに、平安時代の遺物を含んでいた。墳丘南西側のくびれ部に設定した第4トレンチでは、良く叩きしめられた墳丘盛土が確認された。その外側は緩傾斜面をへた後、わずかに掘くぼめられており、周堀と推定された。このことから、くびれ部には幅2m程度のテラスが設けられていたとみられる。墳丘の規模を、今回の測量調査とトレンチ調査の結果から総合して勘案すると、主軸長46m、後円部径28m前後で、従来の数値を改める必要はなさそうであるが、前方部幅については、隅角部の遺存が悪く、明確にしえなかった。立面的には、前方部が後円部に比較して極端に低く、約2.3mの比高差のあることが問題となろう。しかし、後円部の墳頂部の平面形が四角く、盛土等で本来の墳丘に改変が加えられているとみられるので、この差は少し縮まる可能性がある。出土遺物には、円筒埴輪片、馬や器財などの形象埴輪片、須恵器甕片などがある。円筒埴輪片の特徴から、築造年代が6世紀であることは動かないが、詳細については墳形や遺物の検討をへた上で明らかにしたい。(若松)

3 平成3年度試掘・測量調査について

平成3年度の調査は、従来、良く知られているが、その実態が不明な目沼10号墳、巨大な石室で知られるが、終末期古墳として、墳形が今一つ良くわからない上、周辺に開発が及んでいる八幡山古墳、そして墳形が不詳であった川里村舟塚古墳を対象とした。

(1) 目沼10号墳

所在地 北葛飾郡杉戸町目沼字浅間398

立地 目沼古墳群は江戸川を東に望む、宝珠花台地上の東西300m、南北500mほどの範囲にあり、昭和41年に町教育委員会で調査を行い、鈴杏葉が出土した9号墳や、8号墳とは小支谷を隔て台地端部にある。

現況 もとは墳頂部に浅間社が祀られており、その為の盛り土と思われる2m程の急に高くなっている部分がある。また、周囲は土取によってかなり変形しているようである。直径28m程の、南北にやや長い円墳状を呈している。保存状態は良い。

調査の概要 試掘・測量調査の結果、後円部径30.4m、高さ5m(推定)程、前方部を含む全長は46mを越える前方後円墳と確認された。

試掘調査は、敷地の中で周堀の確認が可能と思われる、南北の対角線方向に第1・第2トレンチを設定した。

墳丘南側の第1トレンチでは、幅4.8m、深さ1.2mの周堀を検出した。埴輪は2条の突帯をもつ円筒埴輪と朝顔形埴輪が覆土中から出土しており、古墳の年代は6世紀前半から中葉と推定される。

墳丘北側の第2トレンチでは、幅5m、深さ1.1mの周堀を検出し、覆土中からは、多量の円筒埴輪片があたかも投げ込まれたかのような状態で重なって出土した。

第3トレンチは、墳丘が南西に向かって張り出した部分に設定したが、周堀はさらに外側に延びており、前方部は予想よりかなり大きいことが推定された。埴輪は、第1・第2トレンチとほぼ同様に、墳丘から周堀へ転落したような状態で出土した。

第1・第2・第3トレンチの状況と地形から推定すると、前方部は敷地外へ延びるようであり前方後円形をさらに確定するため、第4トレンチは括れ部の存在が推定された第1トレンチの北に隣接した部分に設定した。

第4トレンチでは、括れ部と、周堀の外側の立ち上がりを検出した事から、周堀は相似形に回るものと推定される。また、括れ部に近い、覆土中に掘り込まれた土壌から、円筒埴輪棺が出土した。
(大和)

(2) 八幡山古墳

所在地 行田市藤原町2丁目27-2

立地 若小玉古墳群は、行田市の市街地の東方、南に埼玉古墳群を望む埋没ローム台地上にあり、かつては8基の古墳によって構成されていた。

現況 八幡山古墳は昭和10年頃に土取の為、石室が露呈し、昭和52年から54年にかけて県教育委員会により、石室の復原が行われた。その際に、周堀部分の一部にトレンチによる確認調査が実施されている。現在は工業団地の中にあり、石室と墳丘の一部が整備されて公園となっている。

調査の概要 試掘調査の結果、直径約80mの円墳と確認された。調査は、前回の確認調査を補足する意味で、主体部の南西部から南東部へかけての公園の敷地内に4本のトレンチを設定して行った。

最も西よりの第1トレンチでは、良好なローム土と黒色土による版築と周堀を検出した。また、墳裾から10m程外へ延びた部分でも、外側の立ち上がりは検出されなかった。

前庭部方向の墳裾部分に設定した第2・第3トレンチでは、第1トレンチとほぼ同様のローム土、黒色土による版築と周堀を検出し、若干の須恵器片や石屑等が出土した。

最も東よりの第4トレンチは、植え込みとコンクリート製の溝による墳裾表示を避けて、墳裾から15m程外に向かって設定したが、周堀の外側の立ち上がりは検出できなかった。
(大和)

(3) 舟塚古墳

所在地 北埼玉郡川里村屈巢字舟塚

立地 鴻巣市との境を流れる元荒川の左岸、140m程の、微高地上に立地し、周囲1km程は、低いローム台地で、南500mの所には、鴻巣市安養寺古墳群があり、この地点も、縄文晩期の集落、古墳時代前期の方形周溝墓等の複合遺跡である事がわかった。

現況 周囲は全て畑地となっている。周辺は、南東から北西に延びる低い台地で、東側は土取りにより1m程削平されており、この古墳も一部を破壊されていることが予想された。また、この低い台地は、篠山となっている地点が最も高く、16.8mである。そして、この地点だけから、形象埴輪片が採集された。

調査の概要 調査は、埴輪片の集中している畑の後方の若干高い、篠山部分を中心として、南東方

向に第1トレンチ、これと直交する南西方向に第2トレンチ、そして北西方向に第3トレンチを設定して進めた。第1トレンチでは、2カ所で、堀状の落ち込みを確認し、南へ延びていた為、この掘の限界を追う為、さらに南に拡張区を設定したが、掘はここまでは延びていなかった。この古墳（跡）に伴うと思われる周堀は、第2トレンチ、第3トレンチで確認された。第2トレンチでは上端で幅3.2m、深さ0.6m、北側の第3トレンチでは幅2m、深さ0.7mと幅が狭くなっている。さらにサブトレンチとして、第2～3トレンチ間に第4トレンチ、第1～2トレンチ間に第5・第6トレンチを設定して調査を進めた。この結果、第4トレンチで古墳の周堀を確認し、覆土中から土師器杯が出土した。以上の周堀の検出状況から、古墳（跡）の規模は、墳裾で直径19～20m程の円墳と確認された。また、時期は6世紀～7世紀初頭と思われる。さらに、第2トレンチ、第4トレンチでは、古墳時代前期の土師器壺が出土している。特に、第4トレンチ出土の壺はほぼ完形で、底部穿孔されており、方形周溝墓に伴う溝と推定され、第2・第4トレンチは各々別の溝と考えられる事から、2基の方形周溝墓の存在が推定できる。又、第1トレンチ、第5トレンチで検出された堀は、土層の観察から、近世のものと思われ、地元の方の話による、ゴボウイン（御坊院か?）と呼ばれる草堂に伴うものと推定される。

（大和）

平成元年度 古墳詳細分布調査実施主要古墳一覧（入間・比企郡市）

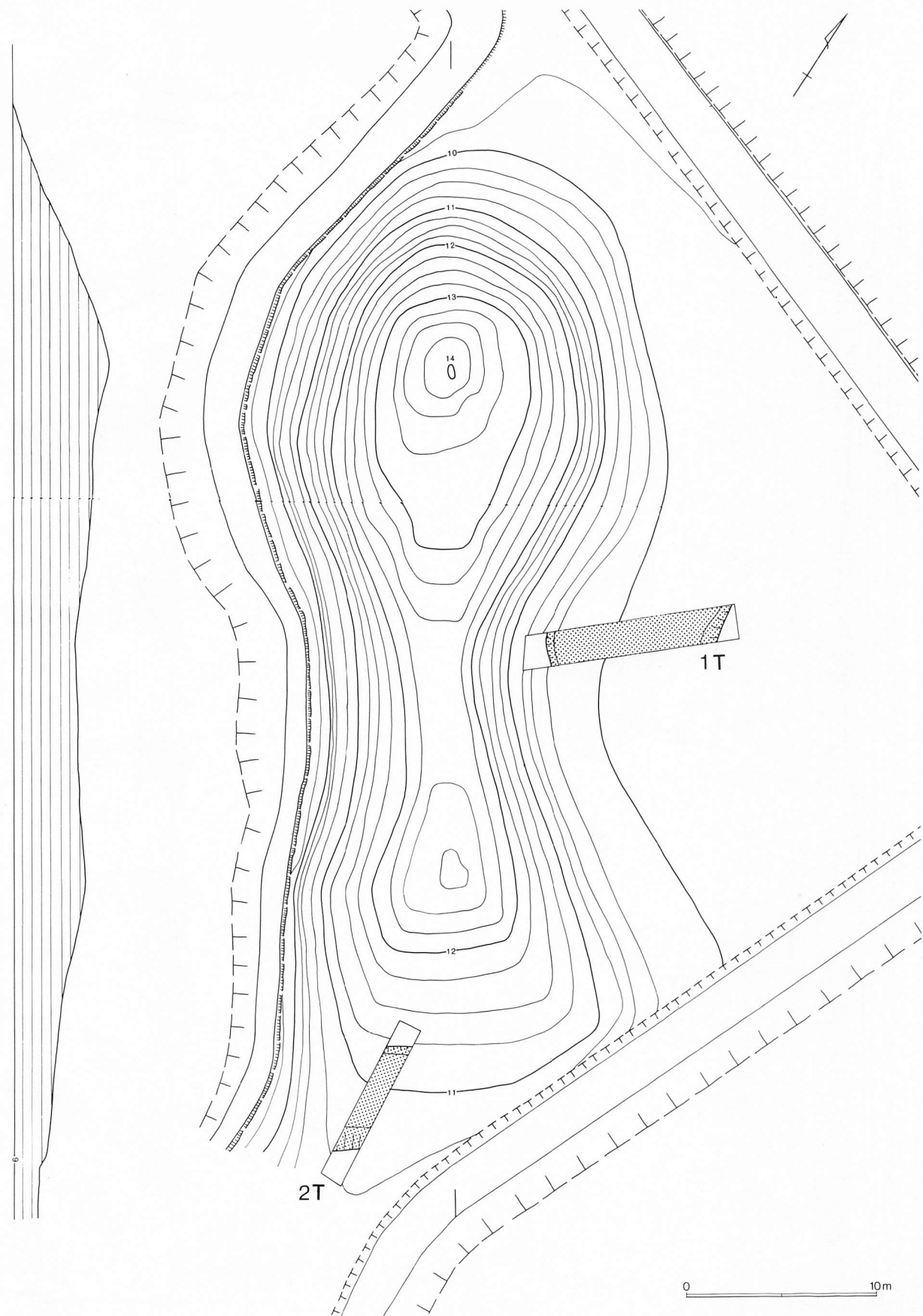
郡	市町村	主 要 古 墳 (群) 名	試掘・測量調査
入間郡	川越市	下小坂古墳群、どうまん塚古墳、牛塚古墳、南大塚古墳群、三王塚古墳、仙波古墳群、慈眼堂古墳、三変稲荷神社古墳、岸町横穴群	
	所沢市	滝之城横穴墓群、北秋津横穴墓群	
	狭山市	上広瀬古墳群、笹井古墳群、稲荷山公園古墳群	
	富士見市	貝塚山遺跡	
	上福岡市	川崎横穴墓群	
	坂戸市	中小坂古墳群、雷電塚古墳、勝呂古墳群、胴山古墳、善能寺古墳群、北峰古墳群、山王塚古墳、成願寺古墳群	雷電塚古墳
	毛呂山町	大類古墳群、川角古墳群、西戸古墳群	大類2号墳
	越生町	谷ツ古墳群、入古墳群	
	日高町	藤塚古墳	
	鶴ヶ島町	鶴ヶ丘稲荷神社古墳	
比企郡市	東松山市	諏訪山古墳群、毛塚古墳群、高坂古墳群、古凍古墳群、亀塚古墳、天神山古墳、柏崎古墳群、おくま山古墳、野本將軍塚古墳、附川古墳群、下唐子古墳群、冑塚古墳、若宮八幡古墳、西原古墳群、鴻の面古墳群、三千塚古墳群、雷電山古墳、弁天塚古墳、秋葉塚古墳、長塚古墳、根岸稲荷神社古墳、岩鼻古墳群	天神山古墳根岸稲荷神社古墳
	小川町	新田古墳群、草加古墳群、西ヶ谷戸古墳群、行人塚古墳群、平松台古墳群、穴八幡古墳	
	嵐山町	栗津ヶ原古墳群、古里古墳群、岩根沢横穴墓群、屋田古墳群、天神山古墳群、稲荷塚古墳、山王古墳群	
	川島町	白山古墳、東大塚古墳	
	吉見町	吉見百穴、久米田古墳群、山の根古墳群、黒岩横穴墓群	山の根古墳
	鳩山町	十郎横穴墓群	
	滑川町	月輪古墳群、天神山横穴墓群、円正寺古墳群、天神前古墳群、菖蒲沼古墳群、ゴエモン塚古墳群、後谷古墳群、中山古墳群、西山古墳群、糟沢古墳群、栗谷古墳群、矢崎古墳群、馬場古墳群、東両表古墳群、大谷古墳群	天神山横穴墓群

平成2年度 古墳詳細分布調査実施主要古墳一覧（秩父・児玉郡市）

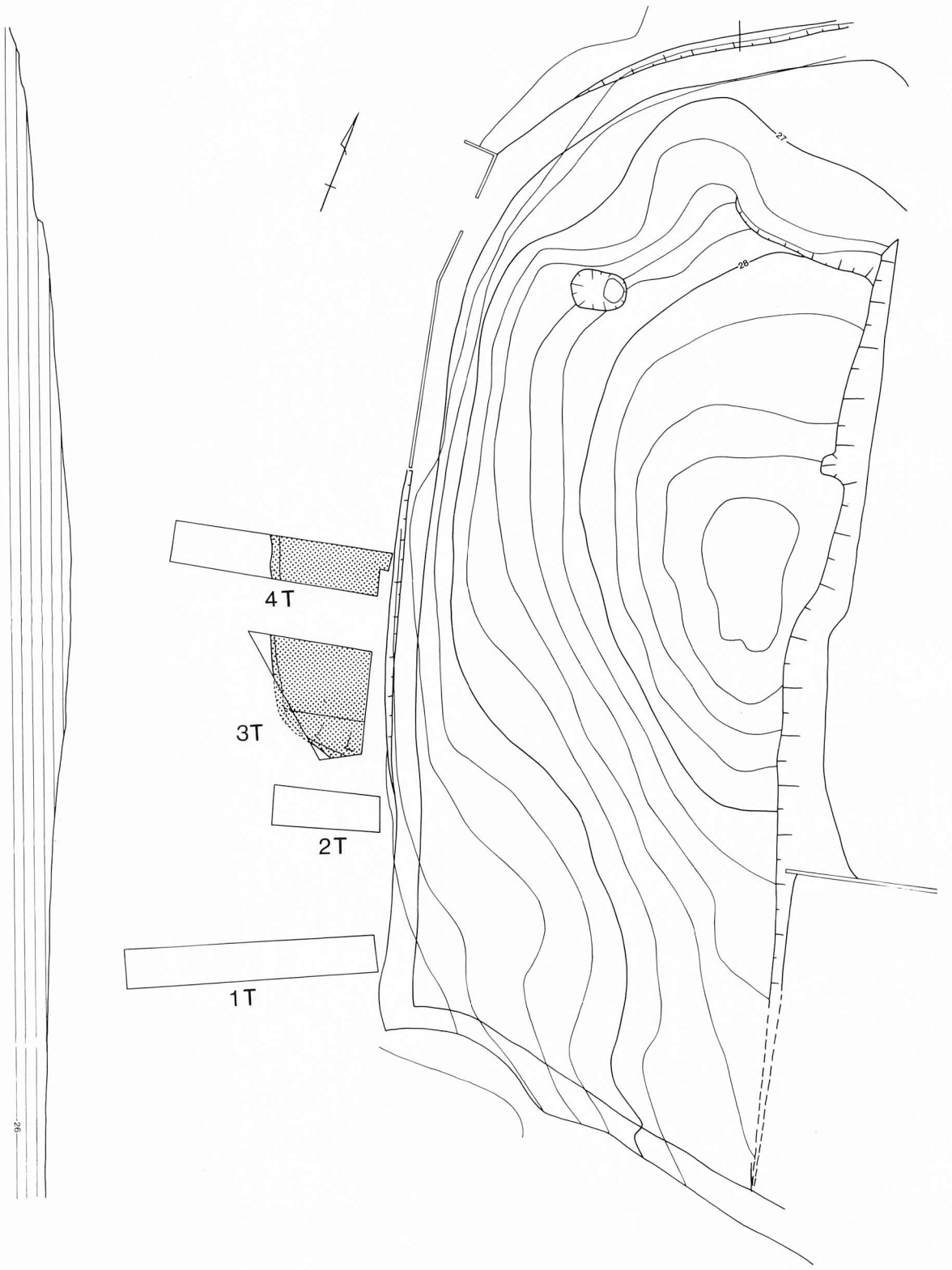
郡	市町村	主 要 古 墳 (群) 名	試掘・測量調査
秩父郡市	秩父市	飯塚招木古墳群、大野原古墳群、金室古墳群、大塚古墳、狐塚古墳、氷雨塚古墳	狐塚古墳
	吉田町	取方古墳群、芦田古墳群、太田部古墳群、牧林古墳	牧林古墳
	小鹿野町	山の神古墳、姥塚古墳、氷雨塚古墳、丸山塚古墳	
	長瀬町	上長瀬古墳群、愛宕塚古墳、浅間山古墳	
	皆野町	金崎古墳群、大塚1～3号墳、天神塚古墳、内手古墳群、中之芝古墳群、円墳大塚古墳、大淵古墳	天神塚古墳
	荒川村	正将塚古墳	
児玉郡市	本庄市	西五十子古墳群、大久保山古墳群、公卿塚古墳、旭・小島古墳群、三奈山古墳	
	児玉町	長沖古墳群、十兵衛塚古墳、秋山古墳群、庚申塚古墳、諏訪山古墳、鷺山古墳、生野山古墳群	長沖157号墳
	上里町	浅間山古墳、旭・小島古墳群、東堤古墳群、帯刀古墳群、大御堂古墳群	
	美里町	塚本山古墳群、普門寺古墳群、羽黒山古墳群、白石古墳群、広木大町古墳群、諏訪山古墳群、諏訪山古墳、長坂聖天塚古墳、川輪聖天塚古墳、生野山古墳群、生野山銚子塚古墳、生野山物見塚古墳、生野山将軍塚古墳、生野山16号墳	
	神川町	四軒在家古墳群、元阿保古墳群、稲荷神社古墳、関口古墳群、姫塚古墳、植竹古墳群、北塚原古墳群、南塚原古墳群、二の宮古墳群、城戸野古墳群、十二ヶ谷戸古墳群、海老ヶ久保古墳群、白岩古墳群、白岩銚子塚古墳、中新里諏訪山古墳	白岩銚子塚古墳

平成3年度 古墳詳細分布調査実施主要古墳一覧（北埼玉・南埼玉・北葛飾郡市）

郡	市町村	主 要 古 墳 (群) 名	試掘・測量調査
北埼玉郡市	行田市	酒巻古墳群、斎条古墳群、小見古墳群（小見真観寺古墳）、若小玉古墳群（八幡山古墳、地藏塚古墳）、白山古墳、埼玉古墳群（丸墓山古墳、稲荷山古墳、将軍山古墳、二子山古墳、愛宕山古墳、瓦塚古墳、鉄砲山古墳、奥の山古墳、中の山古墳、戸場口山古墳、浅間塚古墳、神明山古墳）、小針鎧塚古墳、真名板高山古墳	八幡山古墳
	加須市	鶴ヶ塚古墳、樋遣川古墳群（御諸塚古墳、浅間塚古墳、稲荷塚古墳）、大越古墳群（稲荷塚古墳、八幡塚古墳、浅間塚古墳）	
	羽生市	新郷古墳群（前浅間塚古墳）、羽生古墳群（毘沙門山古墳、保呂羽堂古墳）今泉古墳群（熊野塚古墳）、尾崎古墳群（浅間塚古墳、遍照院古墳）、村君古墳群（永明寺古墳、御廟塚古墳）、小松古墳群（埋没古墳）	
	騎西町	小沼耕地遺跡	
	南河原村	とやま古墳（跡）	
	川里村	舟塚古墳（跡）	舟塚古墳（跡）
	春日部市	内牧塚内古墳群（13基中7基現存）	
南埼玉郡市	岩槻市	浄安寺境内古墳（跡）、塚の腰古墳	
	蓮田市	十三塚古墳群、佐々原古墳（滅）	
	菖蒲町	栢間（かやま）古墳群（天王山塚古墳、押出塚古墳、大日塚古墳、禿塚古墳、夫婦塚古墳）、東浦古墳	
	宮代町	姫宮神社古墳群	
北葛飾郡市	杉戸町	目沼古墳群（20基中3基現存・3号墳・10号墳〔浅間塚〕・17号墳・他は削平又は消滅）、木野川古墳群（8基現存・No60～67号墳）	目沼10号墳
	庄和町	向之内古墳	

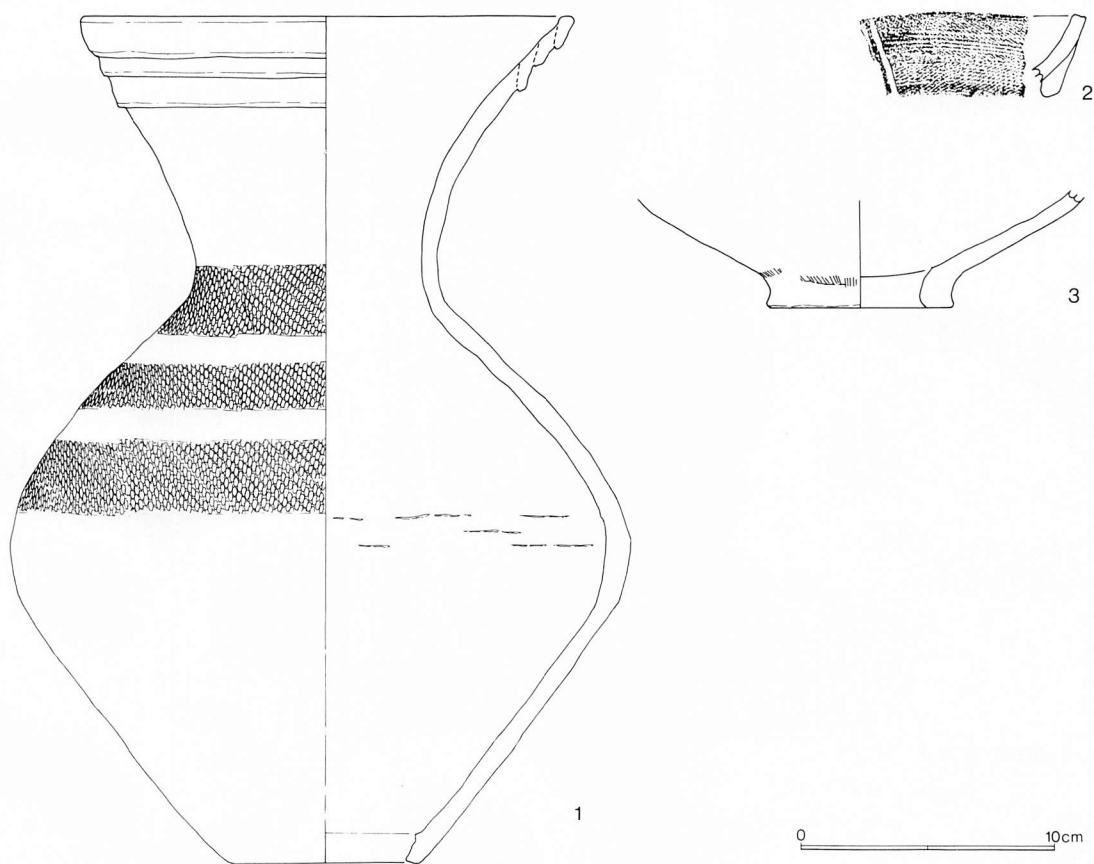
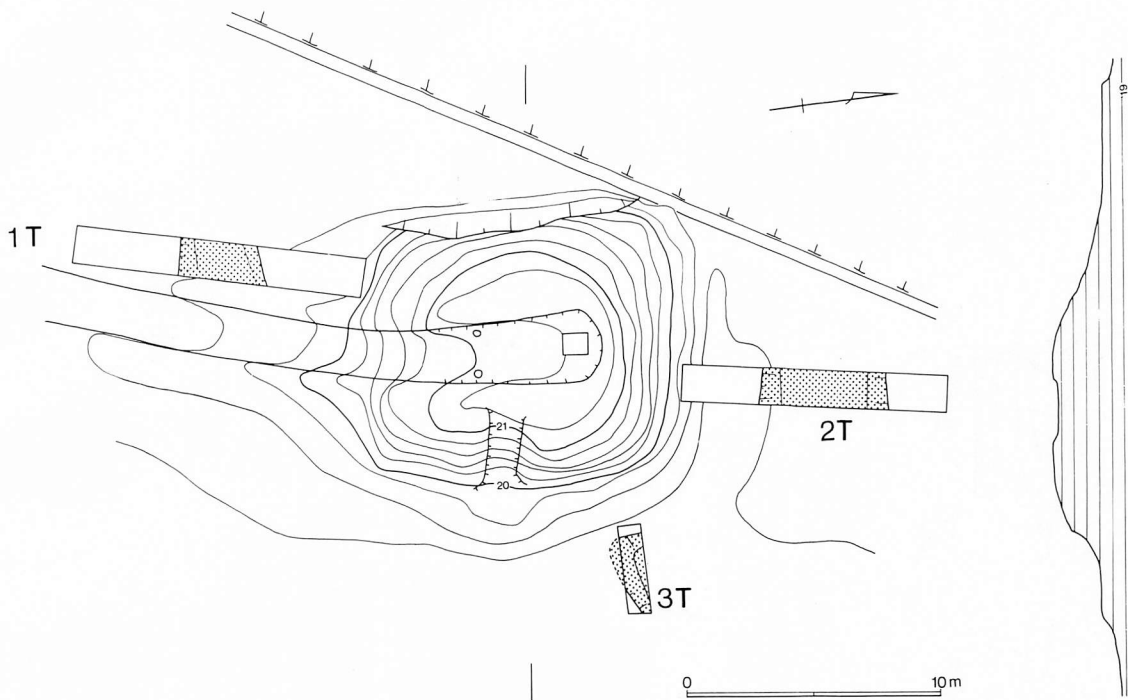


第1図 坂戸市雷電塚古墳測量図

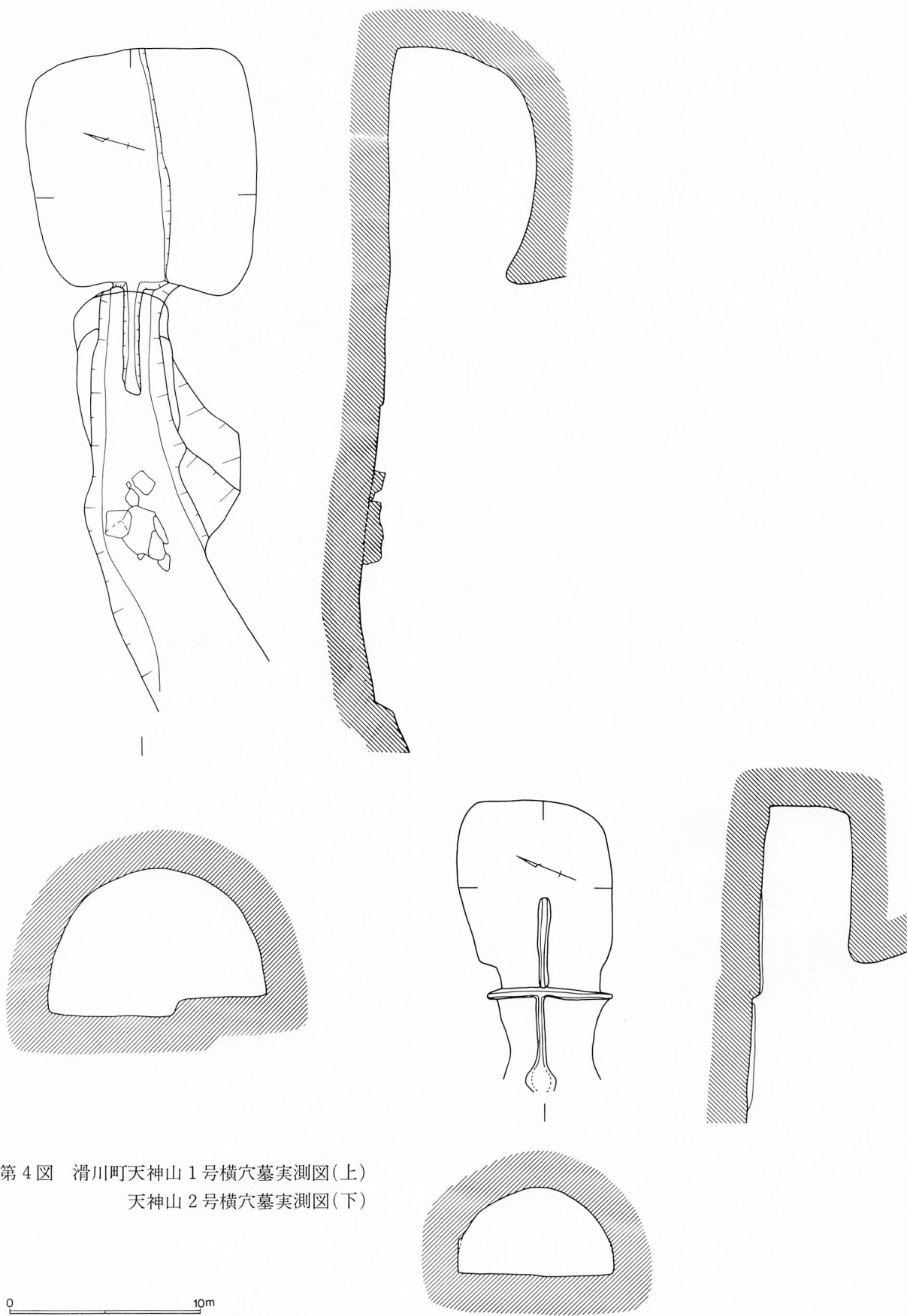


第2図 東松山市天神山古墳測量図

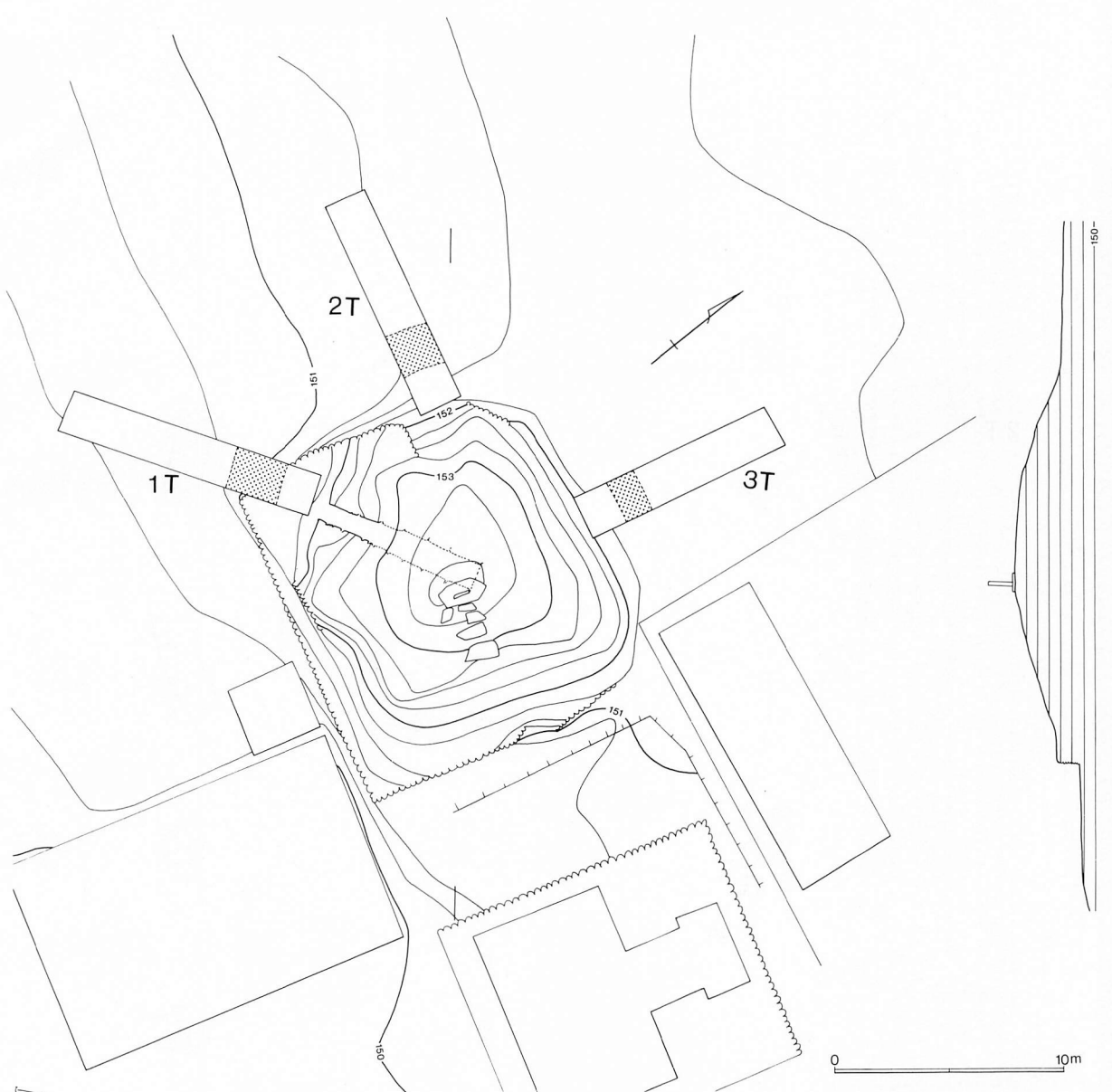
0 10m



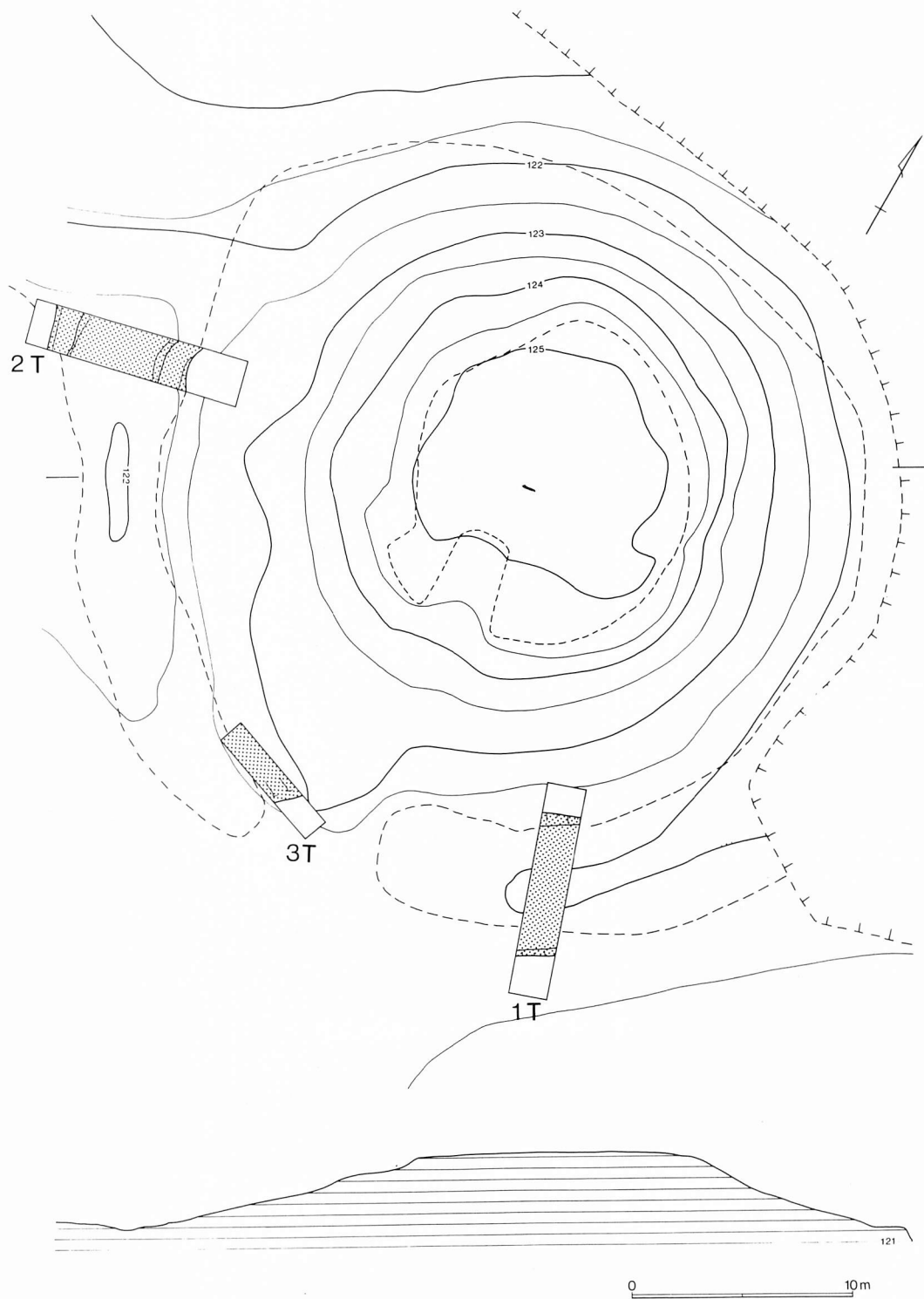
第3図 東松山市根岸稲荷神社古墳測量図及び出土土器実測図



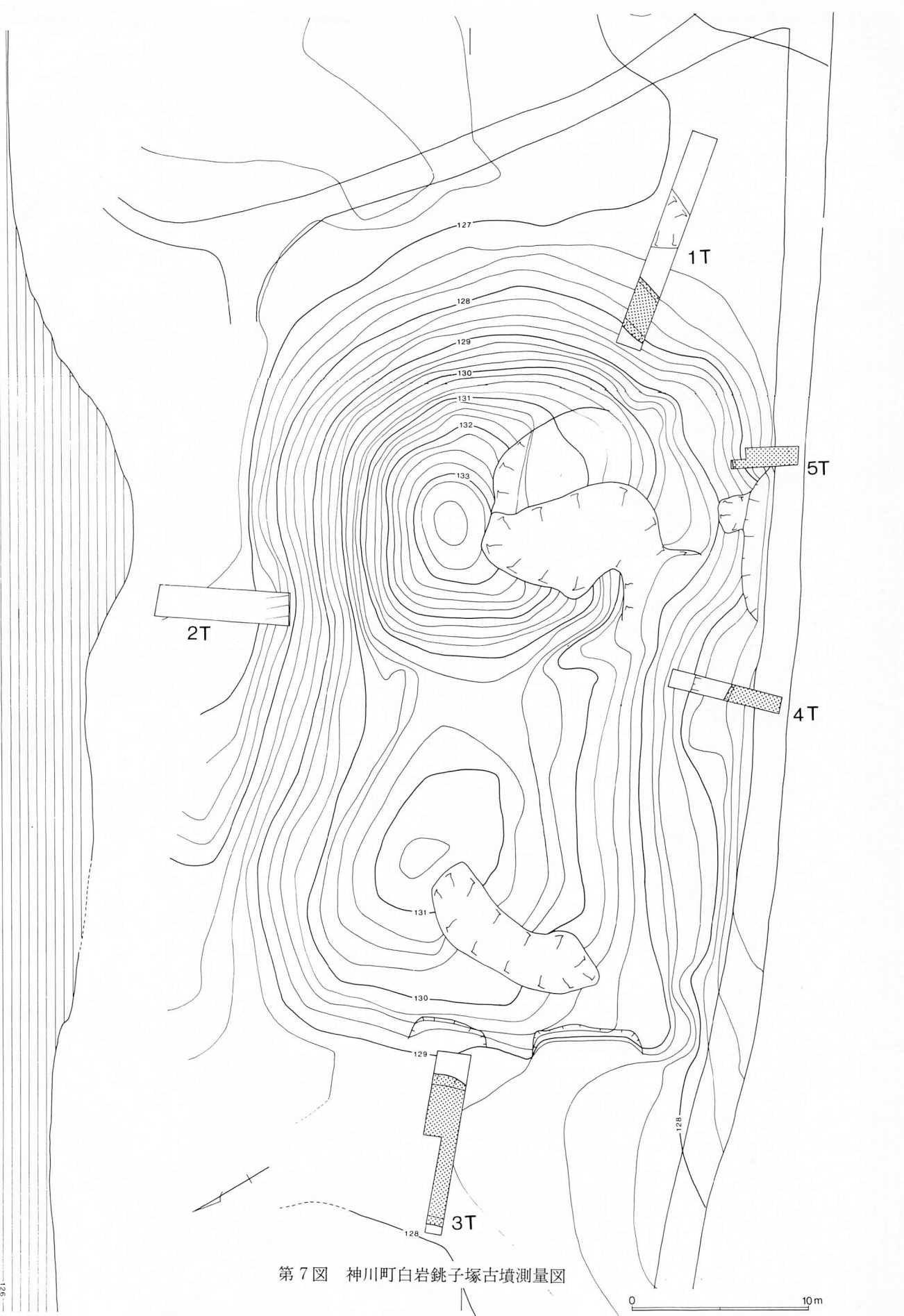
第4図 滑川町天神山1号横穴墓実測図(上)
天神山2号横穴墓実測図(下)



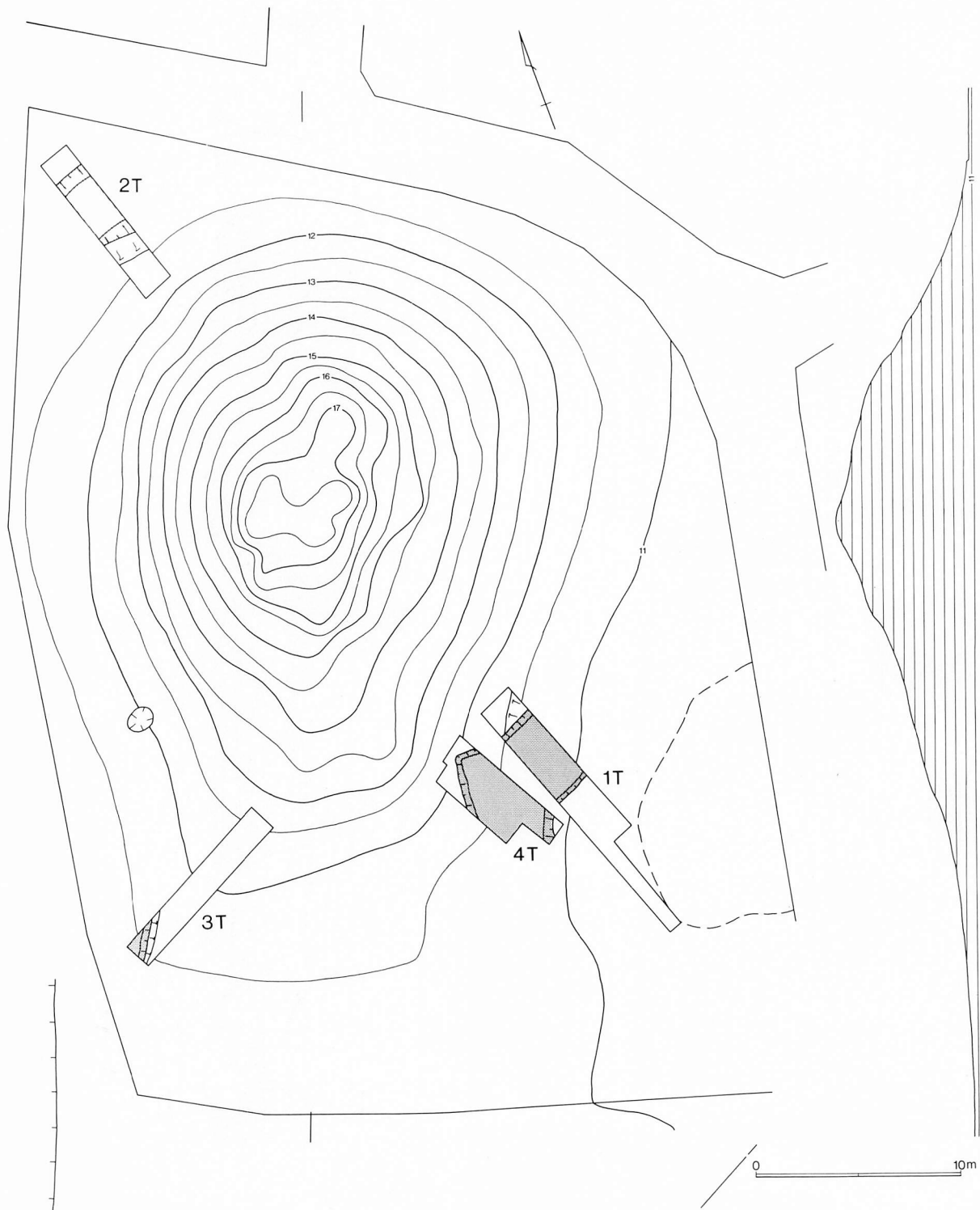
第 5 図 皆野町天神塚古墳測量図



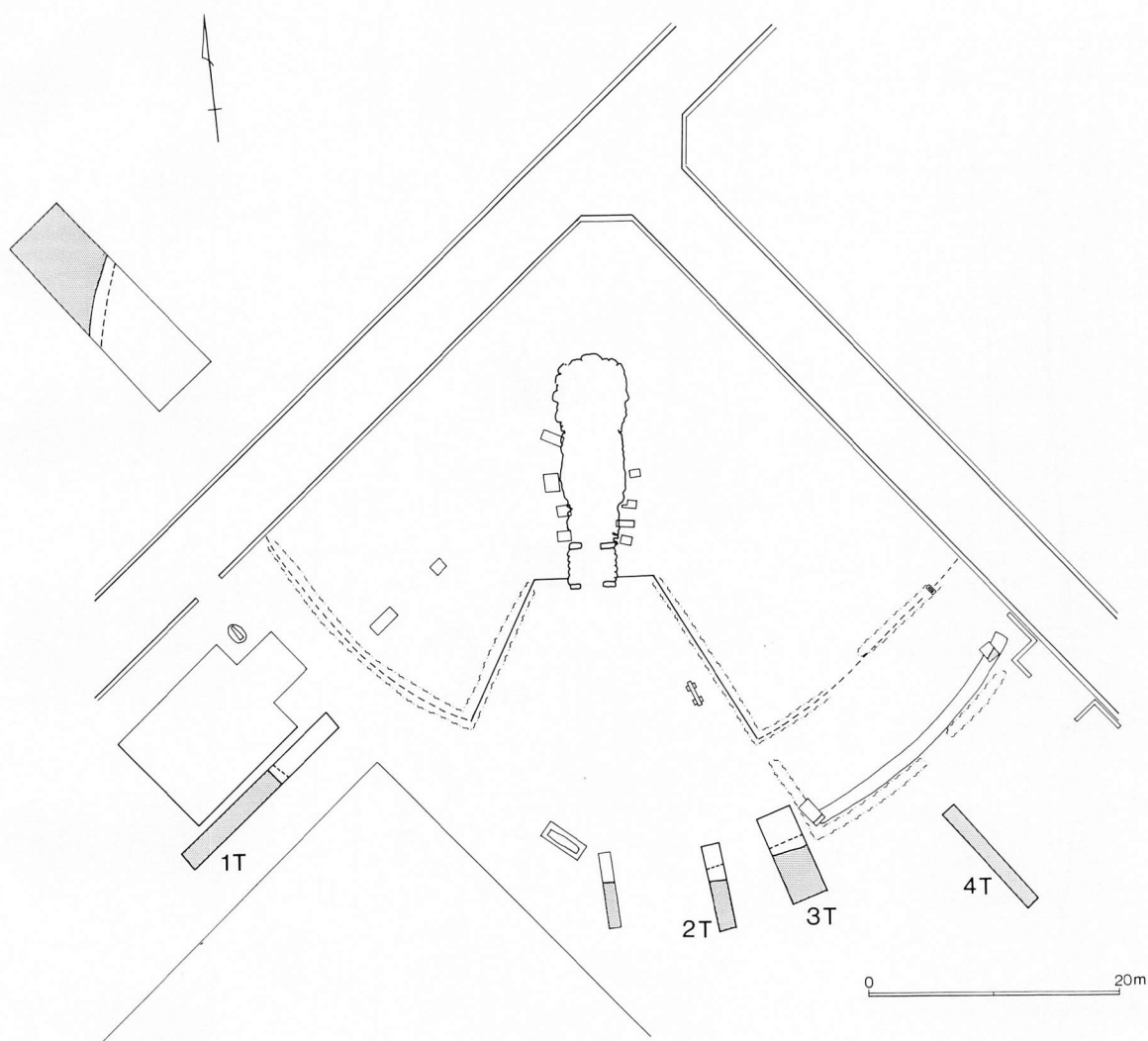
第 6 図 児玉町長沖157号墳測量図



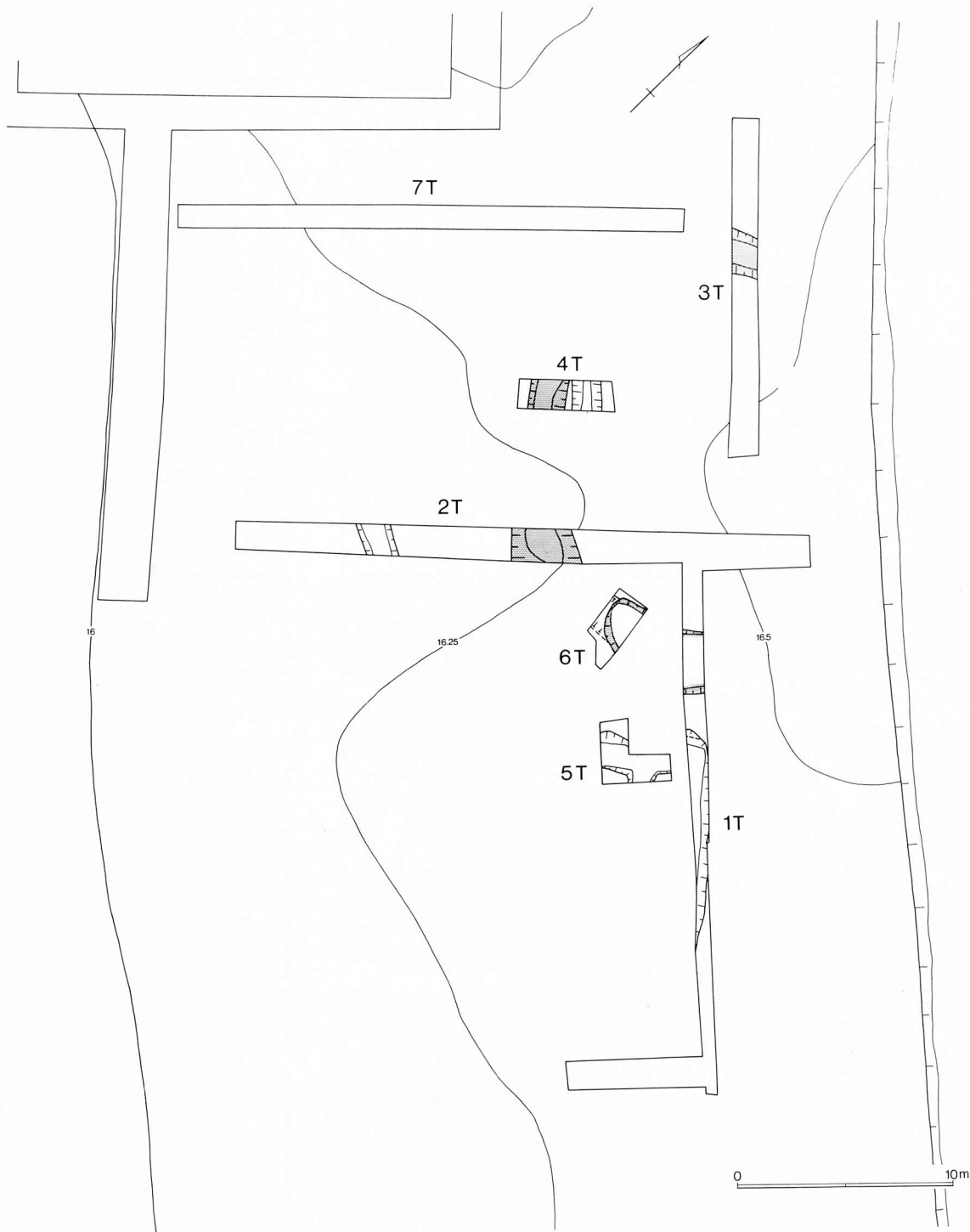
第 7 図 神川町白岩銚子塚古墳測量図



第 8 図 杉戸町目沼10号墳測量図



第9図 行田市八幡山古墳測量図



第10図 川里村舟塚古墳測量図

企画展「くらしの中の神々」覚書

石川博行

はじめに

平成三年度の風土記の丘企画展は、資料館が所蔵する国の重要有形民俗文化財「北武蔵の農具」と移築民家の認識と理解を深めるために家の中の神々について考える展示とした。我々の生活は、都市に限らず、保守的といわれる農山漁村でも時間とともに変容していることは事実であろう。我々の住む家の中を見回してみると、特に食・住の変容は目を見張るものがある。10年前とか、30年前、あるいは戦前といった時間でその当時の生活を区切ると、この変容は少しずつ進むことに気づくが、でも普通に生活をしていると、それ以前の事など忘れてゆくことが多いこともわかる。また、いざとなると表面に表れて再認識することも多いことがわかる。この再認識することも少しずつ変容し、それがまた時間の流れと生活の変容を感じさせている。表面に表れて再認識する神々は家のどこにいるのかを考えようとして、「くらしの中の神々」展を企画した。また、大阪大学助教授小松和彦氏に「家の神々」と題して記念講演会も開催した。

そこで、企画展を準備する中で調査した資料紹介をし、企画展の覚書とする。また、小松先生には、展示解説用として「家の神々」と題した原稿を頂いたが、紙面の都合で掲載できなかったので、ここに掲載し我々の調査研究活動の参考としたい。

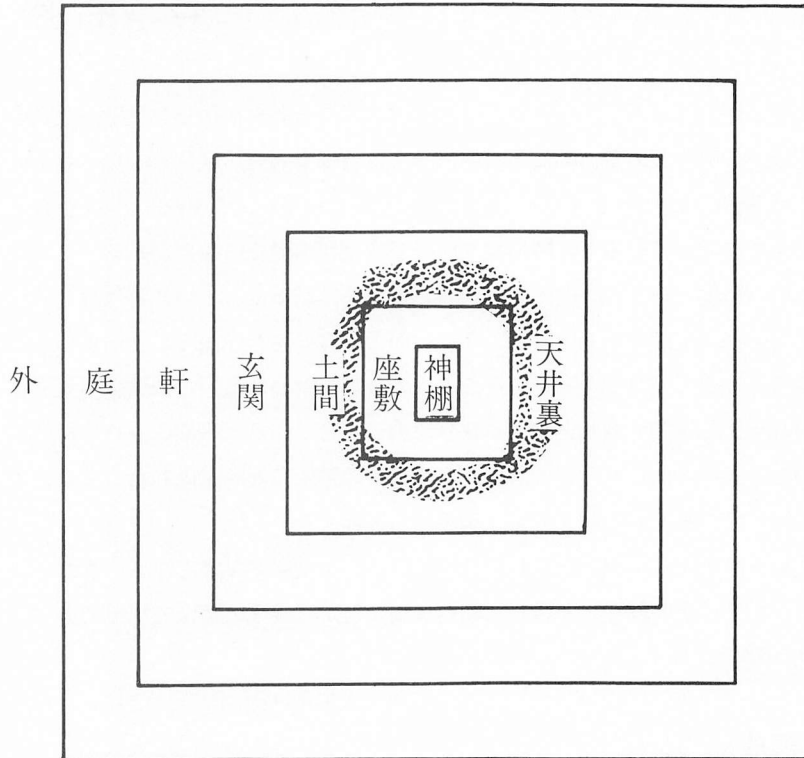
1 展示の構成について

家にはあるところまで行くと境界があって、例えば家の者であっても勝手に出入りすることができない境界がある。他所の者はなおさら、魔（物）は絶対に越えさせない境界がある。このことを模式図にすると、図のとおりになる。また、外を魔（物）がいるケガレた空間とすれば、家は内の清浄なハレの空間とすることもできる。この境界と空間を重ねると、我々は、どの場所にどのような神を迎えて祀っているのか、同時に魔（物）を意識しているのがわかる。そこで展示構成は、外から家の中に入り座敷に上がって行くものとし、

- (1) 軒の神々
- (2) 玄関の神々
- (3) 土間の神々
- (4) 天井裏の神々
- (5) 座敷の神々
- (6) 屋外の神々

とした（註1）。

家の境界の模式図



2 調査資料の紹介

(1) 軒の神々

ハツカコガシ（1月20日）には、小麦を煎りそれを粉に挽き、長虫（蛇のこと）が入ってこないようにと軒下の雨落ちに沿って撒く（鳩ヶ谷）。コガシをコウセンと呼び、5月5日の端午の節供に行う（吉田 浦和）。

端午の節供（5月5日）には、剣に見たてた菖蒲と匂いの強い蓬を軒に刺して、魔物が入ってくるのを防ぐ（吉田 行田 和光）。

七夕（8月7日）には、マコモの馬を軒場に飾る（三芳）。

新盆の家（8月初めから）では廊下に盆堤灯を掲げる（大宮）。

(2) 玄関の神々

神社や寺院の護符・神札を頂いてきて、泥棒や魔物の侵入を防ぐために、玄関の上や戸口に張り、戸守とする（戸田 白岡 秩父 北本）。

七夕が終わるとマコモの馬を玄関に吊し、魔よけとする（行田 白岡）。

魔物の侵入を防ぐため、スズメバチの巣を玄関に吊るす（日高 和光）。

魔物の侵入を防ぐため、サルのコシカケを玄関に打ち付ける（日高 和光）。

魔物の侵入を防ぐため、大國魂神社で買ってきた鳥の団扇を玄関に打ち付ける（新座 三芳）。

魔物の侵入を防ぐため、高尾山で買ってきた天狗の団扇を玄関に打ち付ける（騎西）。

百日咳に罹らないように、お碗を玄関に打ち付ける（八潮）。

魔物の侵入を防ぐため、馬のわらじを玄関に吊す（和光）。

魔物の侵入を防ぐため、馬の蹄鉄を玄関に打ち付ける（騎西）。

魔物の侵入を防ぐため、第六天神社の天狗の絵馬を玄関に打ち付ける（岩槻）。

悪病除として、紙に「馬」の字を逆三角形に逆さまに書き、玄関に張る（秩父）。

魔除け・火伏せ・盗難よけとして、自然に穴の開いた火打ち石を玄関に吊るす（皆野）。

年中払いとして、正月のしめ飾りを掛けておく（騎西）。

年中払いとして、節分のヤッカガシを掛けておく（吉田）。

魔物の侵入を防ぐため、蛇の皮を玄関に掛けておく（吉田）。

魔除に桃の木などで作った弓を玄関にかける（秩父 行田）。

疫病よけ・魔よけ・蛇よけとして7月28日の神社の祭礼の時に茅で作った蛇の頭をもらい、玄関に飾る（神川）。

藤の節供（5月4日）には、山藤を玄関に飾る（吉田）。

フセギ（7月14日）には、樅の枝に護符を付け玄関に飾る（吉田）。

魔よけとして、沖縄土産の魔よけのインテリアを玄関に飾る（騎西）。

（3）土間の神々

玄関の戸の裏に護符や神札を貼り、悪魔払いとする（草加 大宮）。

女の人は、台所の隅にオキヌサマを祀り、守護を願う（川本）。

^{かまど}竈の上に注連縄や幣束を飾り、火の神様、作神様などと呼ばれるかまどの神様を祀る（秩父）。

台所の隅に注連縄や幣束を飾り、火の神様、台所の神様と呼ばれる荒神様を祀る（北本）。

荒神様に鶏や馬の絵馬を供える（戸田 和光）。

荒神様に馬と書いた紙の絵馬とサルのコシカケを供える（戸田）。

土間に厩があったときは厩の前に馬の絵馬を飾り、馬の安全を願う（加須 戸田）。

悪病よけ、魔よけとして鬼の絵馬を飾る（嵐山）。

正月は、俵に幣束やマユダマ、雑煮などを供え、俵神様といって土間に飾る（岩槻）。

小正月は、伏せた臼に石臼を乗せケズリバナやマユダマ飾りを添えて豊作を祈る（行田）。

（4）天井裏の神々

家の鬼門に向かって、毎年、幣束と注連縄を天井裏の柱に結わえ付ける（草加）。

天井裏の柱に、古くなった護符・神札を結わえ付け家の守りとする（草加 坂戸）。
天井裏の梁に、初庚申の日に左縄をなつて結わえ付けて魔よけとする（鳩ヶ谷 新座）。
天井裏の大黒柱に永代安全の護符を結わえ付ける（横瀬）。

（５）座敷の神々

神棚には、神札があって、毎朝あるいは1日、15日の朝には必ず灯明とお水に炊きたてのご飯をあげる。ヤマイリ（1月2日）の日に七草粥に入れる芹を摘んで来て神棚の注連縄に刺して置いた（大滝）。

仏壇は、先祖代々の位牌があってそれを祀り、何かに付けてお願いしたり報告したりする。

エビスダイコクサマは、普段は棚に置かれているが、エビスコ（1月20日と11月20日）には棚から降ろされ、仕事に出掛けるとか仕事をしてお金をたくさん持って帰ってくるなどといわれて箕の中（騎西 吉田）や机（行田）あるいは簞笥の上（北本）に飾る。

子供の健康と生長を祈って、浅間神社に詣（7月1日）で初山の団扇と布巾をいただき床の間などに飾る（行田 桶川）。

子供の安全や生長を祈って、玩具のサルッコを縫って子供に与える（川本）。

子供が生まれると子供の生長や安全を祈って、地藏様に奉納されている人形を借りてきて玩具として与え、無事に5才頃まで生長すると人形を一体造って、借りてきた人形と一緒に地藏様に返す（大滝）。

五穀豊穣を祈って、稲荷神社の土焼きのオコンコンサマを借りて神棚に飾る（神川 吉田）。

布団を入れる押入れの上にへーヤガミサマ（寝床の神様）を祀る（北本）。

正月は、歳神様の掛け軸を床の間に飾る（白岡）。

正月は、天照皇太神宮の掛け軸を床の間に飾る（狭山）。

五穀豊穣を祈って、古いカマドッカエのカマを持って諏訪神社に行き新しいカマと交換し、それを神棚に飾る（騎西）。

正月は、座敷に歳神棚を恵方に向かって天井から吊るして作る（狭山 東松山 日高）。

小正月は、座敷にマユダマ飾りをする（秩父）。

カユカキボウ（小正月の作り物）は、歳神様に供える（長瀬）。

タワラ（小正月の作り物）は、恵比寿大黒様に供える（長瀬）。

ウス・キネ（小正月の作り物）は、歳神様に供える（長瀬）。

ノドウグ（小正月の作り物）は、歳神様に供える（東秩父）。

メオトカザリ（小正月の作り物）は、床の間に飾る（長瀬）。

タカラブネ（小正月の作り物）は、床の間に飾る（長瀬）。

（６）屋外の神々

七夕が終わるとマコモの馬を屋根に上げて、魔よけとする（上尾 白岡）。

子供の歯が抜けると下の歯だと屋根に投げあげ、上の歯だと床下に投げ入れると丈夫な歯が生える。

ダンコン（小正月の作り物）は、井戸神様に供える（荒川）。

外便所には、カタナ（小正月の作り物）を供える（長瀬）。

外に便所があった頃は、烏芻沙摩明王のお姿の書かれた板の便所神様を飾った（戸田）。

屋根には、水や寿の文字を書き、火災にあわないようにとお呪いをする（行田）。

屋根に鍾馗様を乗せ、魔よけにする（騎西）。

屋敷の隅に、麦藁で祠を作り中に御魂石を置き屋敷神として祀り、家の安泰を願う（神川）。

庭先に、竹に鎌を逆さに付けたカゼキリカマを立てて、魔物を防ぐ（日高 皆野）。

庭先に、竹に籠を逆さに付けたメカイを立てて、魔物を防ぐ（行田 和光）。

ヒトガタ・カタシロに家族の名前を書き、ケガレを川に流し、健康を祈る（神川 長瀬 鷲宮 大宮）。

子供の名前を書いたタスキを地蔵様に奉納し、子供の健康や生長を祈願する（行田）。

七夕馬を庭先に飾り、豊作を祈る（行田）。また七夕馬に浴衣を掛けてそれを子供に着せると子供が丈夫に育つ（東松山 日高）。

小正月には、屋敷神様にケズリバナを飾る（草加）。

便所に「しも神様」を祀り、小正月にはカタナとハナをあげる（神川）。

（太字は展示資料）

以上がこの期間に調査した資料で、主に県内市町村発行の市町村史民俗編を参考にした。
 また、企画展の開催にあたっては、調査の段階から多くの方々からご協力を頂いたことをここに明記し感謝の意を表したい。

註1 企画展では、この他に生活の守として「農業の神々」を取り上げた。また、比較のために東京都奥多摩の小正月の作り物、群馬の小正月の作り物、東北の神々（カマガミサマ、オシラサマ、火伏せの神、オシンメイサマ）なども展示した。

玄関の神々



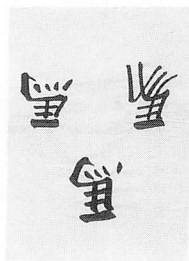
護符
（大滝村）



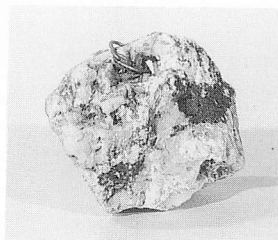
烏の団扇
（三芳町）



天狗の団扇
（騎西町）



逆さ馬（秩父市）
復元資料

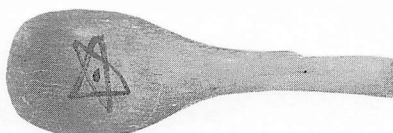


穴あき石
（皆野町）

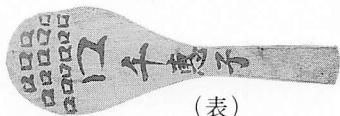
玄関の神々



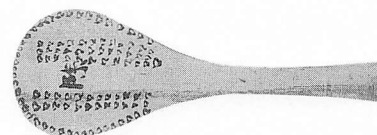
しゃもじ(草加市)



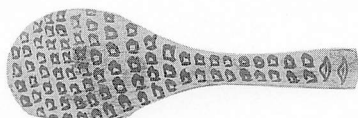
しゃもじ(岩槻市)



(表)

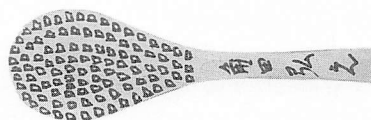


しゃもじ(白岡町)

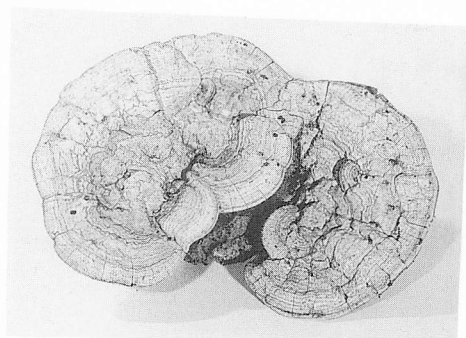


(裏)

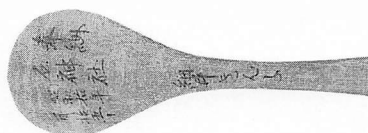
しゃもじ(白岡町)



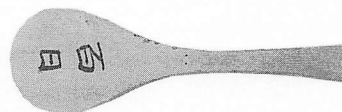
しゃもじ(白岡町)



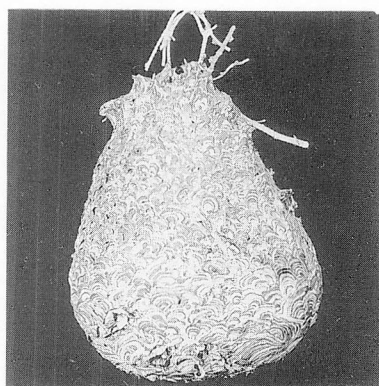
サルのコシカケ(日高市)



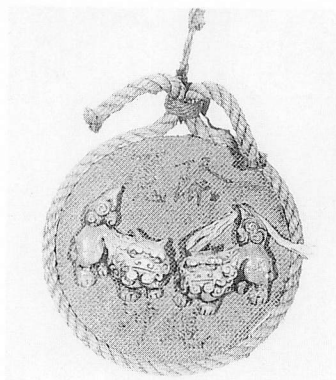
しゃもじ(白岡町)



しゃもじ(白岡町)



スズメバチの巣(日高市)



魔除(騎西町)

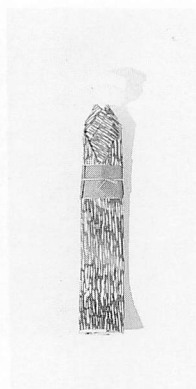
土間の神々



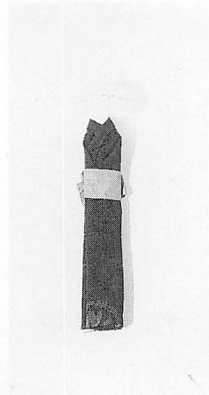
オキヌサマ(川本町)



オキヌサマ(川本町)



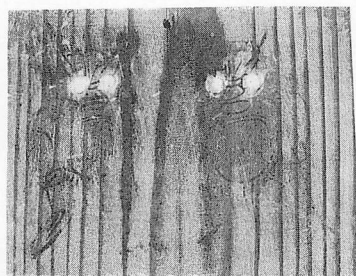
オキヌサマ(川本町)



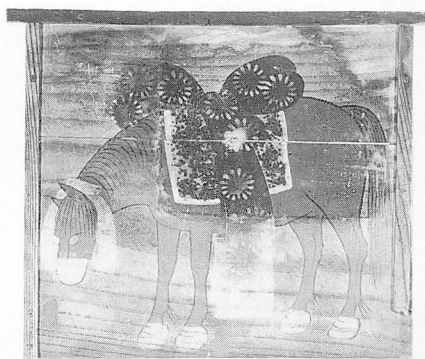
オキヌサマ(川本町)



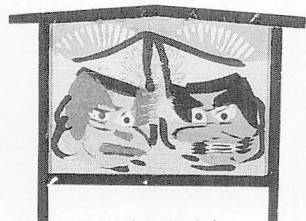
絵馬(戸田市) 復元資料



絵馬(嵐山町)



絵馬(戸田市)



絵馬(岩槻市)



絵馬(戸田市)

座敷の神々

サルツコ(川本町)



(表)



(裏)

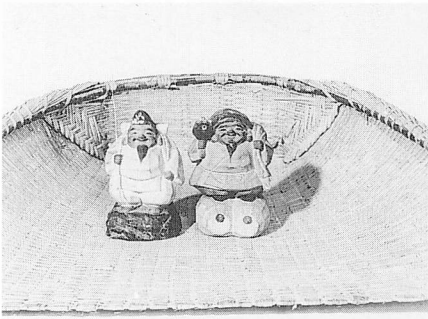
地藏様の人形



(表)



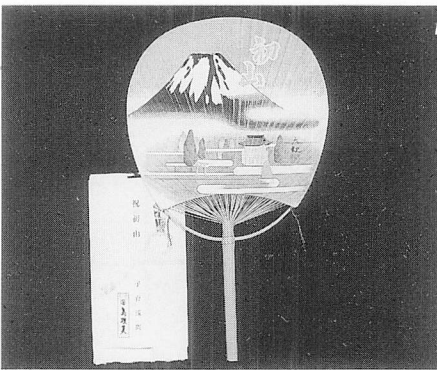
(裏)



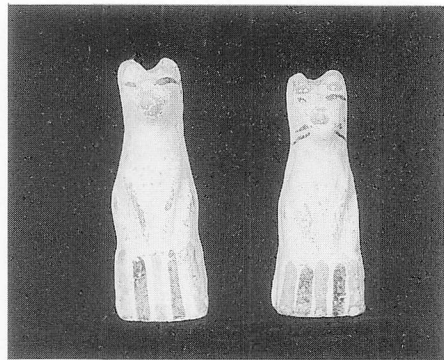
エビスダイコクサマ(騎西町) 復元資料



カマドツカエのカマ(騎西町)

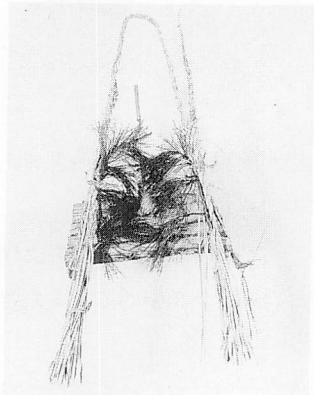


初山の団扇と布巾(行田市)

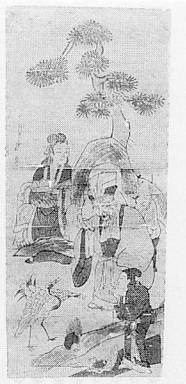


オコンコンサマ(神川町)

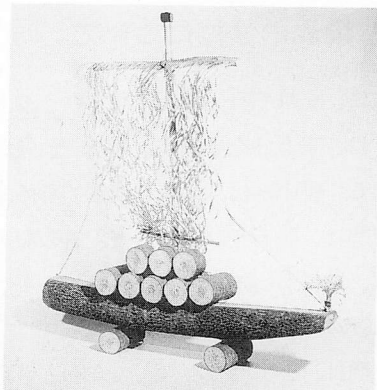
座敷の神々（正月、小正月の作り物）



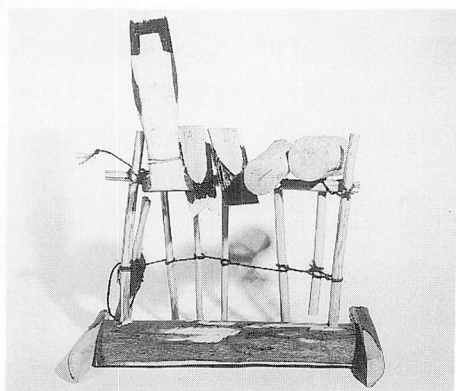
歳神棚(日高市)



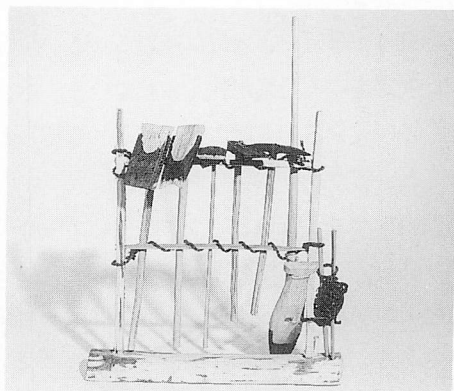
歳神様の掛け軸(白岡町)



宝船(長瀬町)



農道具(東秩父村)



農道具(東秩父村)



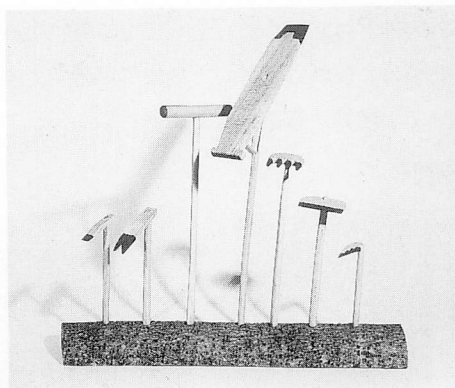
杵(川本町)



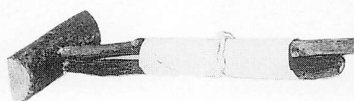
臼(川本町)



鍬(川本町)



農道具(東秩父村)



クダキ(川本町)

3 境界の性格について

次に、それぞれの境界に見られる神々の特徴を考えてみる。

軒は、家と外を区別する境界で、災いをもたらす魔物、神、先祖が出現してくる場所と考えられている。軒の神は、年間を通して意識することは少なく、行事の中で感じられている。

玄関は、防衛者の我々と侵入者の魔物との戦いの最前線となっており、多くの呪いや魔よけが見られ、境界が明確である。性格は、災が入ってこないようにといったお呪いが中心で、塞ぐ要素が強く表れている。

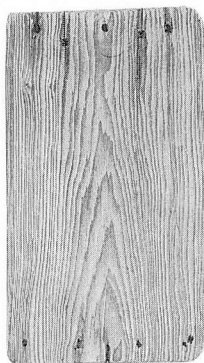
土間は、火を扱う女の人の空間という性格が見える。また、家の経済を守ることに重点がおかれ神々もこれに添った神が祀られている。しかし、玄関の裏側という呪い性の強い境界の裏側も合わせ持っている。

天井裏は、薄暗く、人目に触れることが少ないが、境界である。性格も家全体を守る呪い性と経済的な安定を守る要素が強く表れている。もう一方、床下も人目に付かない境界で、冬至に床下に柚子を投げ入れると火難よけになる（岩槻）とか、子供の歯が抜けると上の歯だと床下に投げ入れるなどとも言う。

座敷の神々は、呪いというより祈願が中心になっている。一般的には、神棚、仏壇、恵比寿大黒様が常駐し、家の安定を守ってくれるといえる。特に、神棚と仏壇は毎日の拝礼にみられるように家の経済的安定や家の永続、家族の健康・生長、その時々の幸せを報告するなど、精神的な拠り所でもある。家の改築などによって座敷のなかでは神を祀る位置が移動することも多く見られ、移動することに伴って神に対する考え自体が変容していることがわかる。このことは今後の研究課題としたい。

屋外の神々は、遠くからやってくる魔物を威圧する神々で、性格は呪い性が強い。屋外に便所があった頃は、便所は不用心で危険な場所で、また、人間にとっては自然に戻るところだとも考えられていて、境界と意識されている。

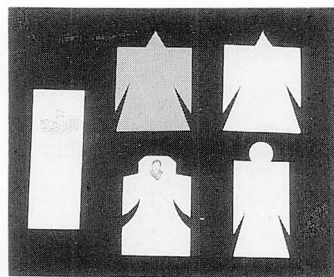
屋外の神々



便所神(戸田市)



御魂石(神川町)



ヒトガタ(神川町・長瀬町)
カタシロ(鷺宮町・大宮市)

4 家の神々

小松和彦（大阪大学助教授）

私たちはいつも「幸せ」になりたいと願っている。「幸せ」の中味は時代とともに変化するといいと思うが、しかし遠い昔から変わらない幸せの中味もあった。たとえば健康（無病息災）でありたい、豊年満作でありたい、立身出世したいといった願いは、今も昔も多くの人びとの共通の願いであるといえよう。

日本は長く農業を基盤とした文化を形成し、「家」および「ムラ」と呼ばれる社会集団のもとで生活を営んできたので、主として庶民の文化は「家」と「ムラ」と農業をめぐるはぐくまれてきた。そしてその内容はまことに多彩である。しかし、「ムラ」と「家」の利害はときには一致し、またときには相反した。そこからさまざまな祭りや共同作業や「掟」が生み出され、また問題も生じたわけであるが、概して近世以降の日本人は「家」に比重を置いた価値観を強調し、その結果、「家」の存亡、盛衰に多大な関心を払ってきた。このため、高度成長期以降、急速に前近代的な民俗文化が消滅していったにもかかわらず、「家」をめぐる民俗は今日でもなお各地で根強く生き続けているといえるのである。

「家」はいくつかの側面から構成されている。一つは人間集団という面である。「家」集団は血縁を核とした集団で、その内部においても頭主を頂点とする権力・権威のシステムが確立されていたが、互いに協力し助け合う集団として認識されていた。つまり、人びとはまず「家」のメンバーの互いの「幸せ」を求めて生活していたのであった。

では、どのようにして「家」の「幸せ」を実現したらいいのだろうか。もちろん、その最前提はメンバーたちの肉体を用いての努力つまり労働であった。しかし、それだけでは充分ではなかった。というのは、それにもかかわらず、「幸せ」の実現を妨害するもの、凶作や災害や病気が生じたからである。

これが「家」のもう一つの側面である。このために、人びとは神にすがろうとした。人びとは神の力で「不幸」を防いだり除こうとした。日本にはさまざまな神が存在していると、信じられていたので、そうした神々の力を借りて人びとは「家」の繁栄をはかろうとしたのである。たとえば、正月には家中の者が「恵方訪り」（初詣で）をして健康その他を祈った。節分には豆をまいて鬼＝災厄を追い払おうとした。また、五月の節供には菖蒲で魔よけをしようとした。それだけではない。靈驗あらたかと評判の高い社寺があれば、その社寺の神仏の力を借りて家を守ってもらおうと護符のたぐいを手に入れて、戸口に貼ったりした。富貴自在との評判の高い「恵比寿」や「大黒」「稲荷」なども積極的に勧請し、家のなかや屋敷に祭ったのであった。しかも、それが高じて、カマドにはカマド神が、便所には便所神が、といった具合に細分化されるまでに至った。日本の神は分業化されたのである。そして、そのために日本の神観念は多彩なものになったともいえるのである。

この「くらしの中の神々」の展示を御覧いただくと、そのあたりのことが充分におわかりいただけるのではないだろうか。

参考文献

都丸十九一ほか（1990）：関東地方の住い習俗 明玄書房

新井栄作（1978）：おきぬさま信仰 埼玉民俗第8号

清水武甲（1971）：秩父民俗 耕地の人々 木耳社

吉田町（1982）：吉田町史

浦和市（1980）：浦和市史 民俗編

和光市（1983）：和光市史 民俗編

三芳町・富士見市・大井町・上福岡市教育委員会（1974）：埼玉県入間東部地区の民俗一年中
行事の変化―

大宮市（1969）：大宮市史 第5巻

戸田市（1983）：戸田市史 民俗編

白岡町（1990）：白岡町史 民俗編

北本市教育委員会（1989）：北本市史 民俗編

日高町（1989）：日高町史 民俗編

与野市（1980）：与野市史 民俗編

大井町（1985）：大井町史 民俗編

騎西町（1985）：騎西町史 民俗編

岩槻市（1984）：岩槻市史 民俗編

草加市（1987）：草加市史 民俗編

八潮市（1985）：八潮市史 民俗編

皆野町（1986）：皆野町史 資料編5 民俗

神川町（1989）：神川町誌

坂戸市（1985）：坂戸市史 民俗資料編

鳩ヶ谷市（1988）：鳩ヶ谷市史 民俗編

桶川市（1988）：桶川市史 民俗編

狭山市（1985）：狭山市史 民俗編

東松山市（1983）：東松山市史 資料編第5巻 民俗編

富士見市（1989）：富士見市史 資料編7 民俗

滑川村（1984）：滑川村史 民俗編

荒川村（1983）：荒川村誌

東京学芸大学民俗研究会（1969）：古利根の村と山の村 埼玉県駒西町正能

埼玉県立さきたま資料館（1977）：さきたま民俗歴

埼玉県立歴史資料館（1986）：小正月とモノツクリ

埼玉県（1986）：埼玉県史 別編2 民俗2

埼玉県立文化会館（1969）：埼玉生活文化シリーズⅢ 住居の歴史 真珠書院

埼玉県教育委員会（1980）：埼玉縣市町村誌20巻

資料紹介

農家の手紙

新収集資料「手習双紙 普通農用文」から

田中裕子

はじめに

当資料は平成2年度、吹上町榎戸の棚沢良夫氏から寄贈されたものである。全体で90ページの和紙を紙捻り（こまねり）で簡単に綴じた冊子となっている。（法量約25、0cm×17、5cm）。

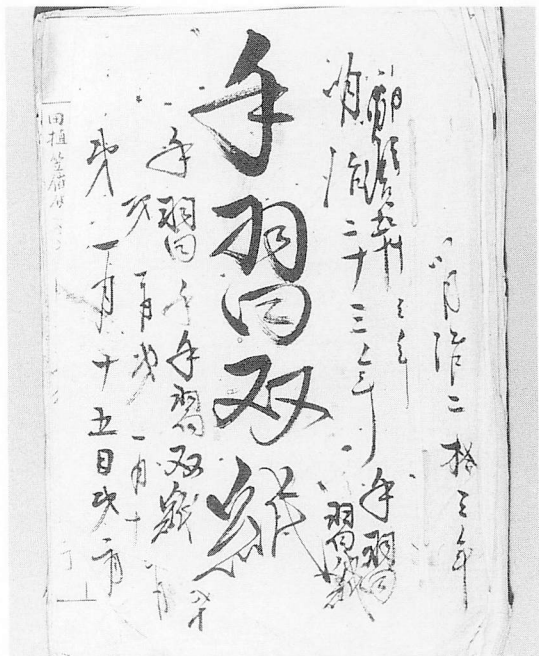
表紙に「明治23年1月15日」という記述があるが、「手習双紙」という名のとおり、ここにも練習書きの痕があるので年代の確定は難しい。なかに「埼玉見北足立郡吹上村大字榎戸村 棚沢兼三郎」の署名があり、この人が当資料の書き手であることがわかる。この棚沢兼三郎という人は、明治2年（1869年）生まれ。明治23年当時は、21才位ということになる。資料寄贈者の良夫氏からみると曾祖父の弟にあたる人である。碁や将棋が得意な人であったという。また、古典籍を読むことも好きであったらしい。棚沢家の本家をついだのは、兄の金右衛門であり、弟の兼三郎は、分家にでている。当資料は、彼が、分家にでる前に書いたものであろうか。

棚沢家は、代々農家である。また、その傍ら役場に勤めるなどしており、消防団や神社の役員をも勤めてきた家柄である。手紙を書くことも少なからずあったであろうからそのために備えておいた冊子なのだろうか。

目次をみると様々な状況を想定した手紙文が並び、いわゆる「手紙の例文集」であることがわかる。手本をみて書き写しているとおもわれるので、ところどころ誤りもあり自分の文章として使いこなしていないことがうかがえる。さらに、文字のくずしかたに我流の部分があり、形が独特で判読は困難であった。しかし、文字の書き手としては筆の扱いに慣れていて文字には勢いがある。

当資料の90ページ中16ページには手習いをしたと思われる部分が綴じられている。中には、なぐり書きをしたようになりかなり墨色が重なっているページもある。

当資料の性格が「手習双紙」とあるように、基本的には手習いをした帳面なのかもしれないが、ここではその練習課題となった手紙文の内容をいくつか紹介したい。



「手習双紙」表紙

1 「普通農用文目録」から

当資料には、はじめに目録がついている。そこでは、「普通農用文」となっており、この原本を手習いしたのであろう。なかなか興味深いタイトルがあり、こんな手紙を書く人もあったのかと感心させられる。

以下、目録を列挙してみる。

普通農用文目録

新歳の文	一丁
同答	二丁
春寒見舞の文	二丁
同復	三丁
暑中見舞の文	四丁
右返事	五丁
寒中見舞の文	六丁
同回章	八丁
歳暮の文	九丁
同答	九丁
作物の豊凶を門ふ文	十丁
豊年の文	十丁
答える文	十二丁
農具を借る文	十三丁
茶の景況を豊する文	十四丁
新茶を贈る文	十五丁
苗物を貰う遣す文	十六丁
同回章	十七丁
田植に人を雇う文	十八丁
同答えの文	十九丁
田植笠催促の文	二十丁
同復	二十一丁
雨祈りを催す文	二十一丁
右に答える文	二十三丁
大根種を請求する文	二十四丁
同回答	二十五丁
堤防破損につき人夫を乞う文	二十六丁
落花生を贈る文	二十七丁
同返事	二十八丁

農休に人を招く文	二十九丁
同返事	二十九丁
洪水尋問の文	三十丁
議開墾文	三十一丁
同復	三十二丁
養蚕結社の文	三十二丁
同復	三十四丁
告山林人札文	三十三丁
同復	三十五丁
新築落成開店を知らせる文	三十四丁
開店後友人を招待する文	三十七丁
開店の人に送る文	三十六丁
生糸の景況を報する文	三十九丁

以上の手紙文の雛形がある。これをみると春夏秋冬時節にあわせた儀礼的な手紙だけでなく贈答に際しての手紙や、道具の貸し借りなどの各種依頼文等様々な手紙文があることがわかる。大体往復の文章が対になっている。

2 手紙文の具体例

この中から、

- ① 農具を借る文 十三丁
- ② 田植に人を雇う文 十八丁
- ③ 同答えの文 十九丁
- ④ 農休に人を招く文 二十九丁
- ⑤ 同返事 二十九丁

を書き下してみる。

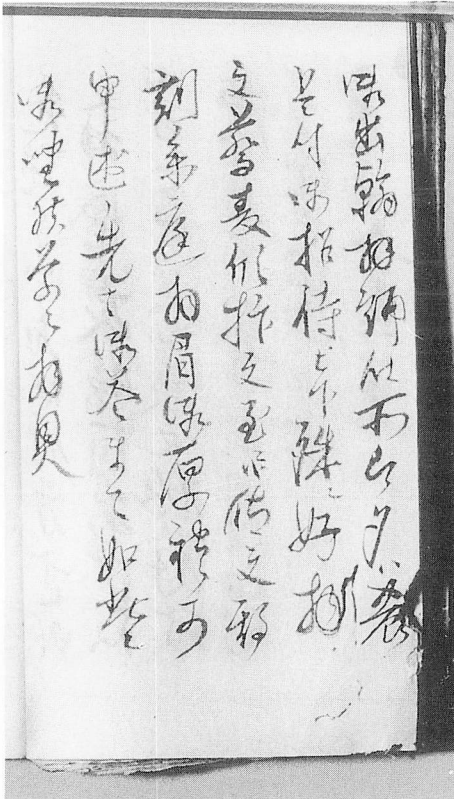
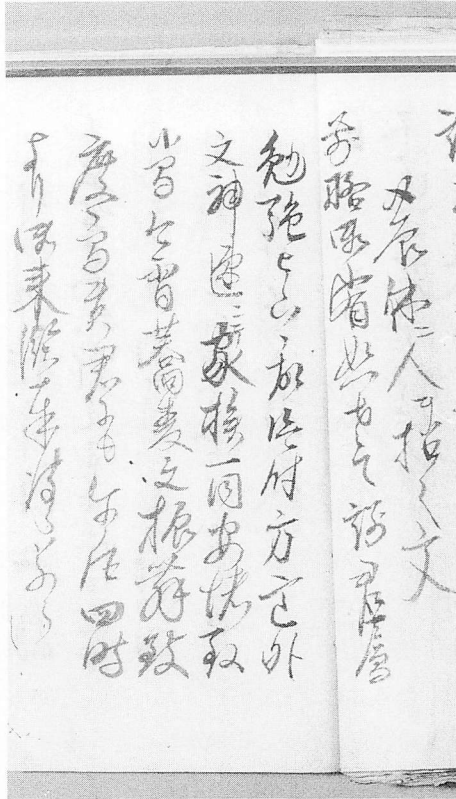
末中存年之い即ち支那東
苗を育るも上旨は取取能下
為尚迄有は中も有は
解其文の言は遠慮を
嘉越お成度候

田植人ヲ雇ふ文

四五日前より天気打続候
御同様好時機にて、仕合之
事ニ候、貴家御家例之如く、
当年モ無備植付御仕舞
被成、御目出度奉祝寿
候、拙家モ例ニ依り昨日より取
掛り申積りニ御座候、就テハ今
年モ不相變植付人夫雇入
申度ノ間夫々へ御通報願
度、若又差支之向モ之有候ハ
ハ、其内御申越被下度、先者
右御依頼迄、早々拝述

田植ニ人ヲ雇ふ文

四五日前より天気打続候、
御同様好時機にて、仕合之
事ニ候、貴家御家例之如く、
当年モ無備植付御仕舞
被成、御目出度奉祝寿
候、拙家モ例ニ依り昨日より取
掛り申積りニ御座候、就テハ今
年モ不相變植付人夫雇入
申度ノ間夫々へ御通報願
度、若又差支之向モ之有候ハ
ハ、其内御申越被下度、先者
右御依頼迄、早々拝述



農休ニ人ヲ招ク文

前略御宥怒、さて諸君一層
勉強被下^レ故、臨時方定外
之神ニ速ニテ家族一同安堵致
候間、今宵蕎麦之振舞致
度候間、貴君にも午后四時
より御来臨奉得^レ、万々
不尽

同返事

御書翰拝誦仕所今夕ハ農
上ニ付、御招待被下、殊ニ好物
之蕎麦欣拵之至ニ候、依之斯
刻参庭拝眉御厚禮可
申述^レ、先は御答まで、如此ニ
御坐候 草々 拝具

(1) 農具を借る文

「雨後新晴痛快の事に」という時候の挨拶から、梅雨明け頃の手紙ではないかと思われる。霖雨（長雨）の為にぬかった空き地を開拓したいので、米国製の農具を借り受けたいという依頼文である。

何点か購入しているという米国製の農具とは何であろうか。普通の農具でも貸し借りはあったであろうが、こと米国製農具となるとその賛辞もひとしおである。

大きな作業をする時つまりたくさんの人出たくさん道具がある時には、他人から道具を貸して貰う事を前提に道具の数を揃えることもあったのであろうか。いうまでもなく農具によくみられる墨書きや刻印は所有者を明示するものである。結などの制度ゆいとともにこれらの農具の貸借関係にも目を向けたいものである。ちなみに次掲の田植作業の時に各自が持参するのは、苗取り腰掛けだけということであった。

(2) 田植に人を雇う文

田植に際し、手伝いの人を雇いたいという依頼文である。

田植は農作業の中でも一大事業であり、その終了は目出度い事であった。文中「貴家御家例の如く」とか「拙家も例により」とあるのは、毎年田植の作業に取掛かる期日が家ごとに決まっていたものと思われる。その上で植付け人夫を順次雇い入れていたものと思われる。

棚沢家では、自分の家の田植が終ると、組内とか親戚を互いに手伝って、田植作業がほぼ一緒に終るようにしていた。日傭取りを頼んでいたので、そういった植付け人夫を頼む日が重複しないように気をつけていたという。

この手紙は、まさにこうした様子が窺える。

(3) 同答える文

「其の雇夫其の地衆家の御陰を以て誠に手回し宜敷く欣喜の至りに候」とあって多くの人手がかかっている事が分かる。「其の地衆家」とあるのは、結の様なものであろうか。雇夫とは区別して考えている。

「若また差支えの者これ有候節も他を頼み入り御不都合無き様」とあるのは、植付け人夫の数が減ってしまうことを懸念しての事であろう。田植が期日どおりに終らなければ、後に控え



『農業全書』より「田植えの様子」

ている他の家々にも迷惑がかかり、ひいては収穫にまで影響することも考えられる。田植を重要視する所以である。

(4) 農休に人を招く文

農休みに蕎麦を御馳走しようという招待文である。

「定外の神」とは、皆が一生懸命に働いたので予定外に仕事が早く終わった。それで神が速やかにやってきたということであろうか。

「家族一同が安堵」するような農休みとはサナブリなのか。夕刻から蕎麦を振舞いたいということであるが、この手紙文だけでは見当がつかない。

(5) 同返事

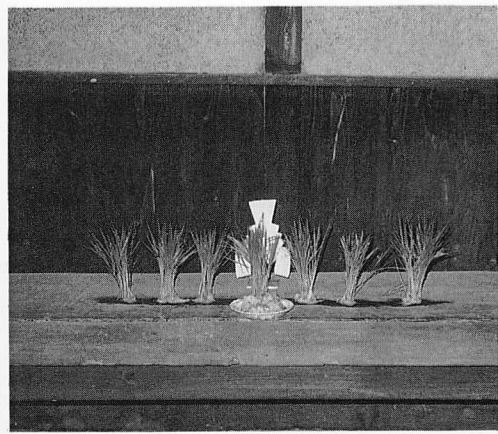
(4)の返事である。この手紙の中に「農上(ノアガリ)」という言葉が使われているので、この農休みがノアガリ正月であることがわかる。田植の作業が終了したので農休みにして皆に蕎麦でも振舞おうという事であった。「欣抔の至に候」とあるが、これは手をたたいて喜ぶということである。多少大げさではあるが、これほどの楽しみであったことは事実かもしれない。

「ノアガリ」とは、農作業の区切りがついた事をいい、『改訂総合日本民俗語彙』（財団法人民俗学研究所編）によると、以下のような説明がある。

ノアガリ

野上がり。ウエツケヤスミともいい、一集落共同の休みである。兵庫県印南郡では、柏餅などを手伝いの人に贈ったり、その人たちを招いたりする。三重県安芸郡白子町でも、ノアガリは、村中が植え果てた時の祝で、サナブリの方は、むしろ家々の田植終りの事であった。

吹上町榎戸にもノアガリ正月があったという。これは、村全体の仕事がひとかたついた時のムラ



サナブリのお供え

の休みで、主に、田植の時のことであったという。その時の御馳走は、ボタモチや手打うどんが多かったが、時には、蕎麦を打つこともあったようだ。

サナブリも田植終りの祝であるが、これは家毎に行われた。当日の手伝いの人に夕飯を御馳走する祝のことで、この時には田植に使った道具を綺麗に洗って御神酒を供えたものだという。



『年中行事図説』より「田植祭」

さて、田植の神に対する意識であるが、榎戸周辺の高齢者の中には、コウジン様とエビスタイコク様の2つの神を田の神様として意識している人がいる。はじめに述べたとおりこの手紙文は実態に即していないので、「定外の神」をすぐに「田の神」と結びつけることは難しい。参考までに付け加えておくにとどめたい。

まとめ

明治期に通信の手段として手紙がどの位使われていたのかということ、さだかではない。すでに、郵便制度は導入されていたであろうが、これらの雛形からみると制度を利用した手紙の配達ではなく、信頼できる人に手紙を託しその場で返事を預かってくるといった方法が根強く残っていたように見受けられる。現代のようになにごとも電話ですませるのではなく、手紙で往復させる悠長さは一種の贅沢かもしれない。

農村では、予定外の農休み(=〇〇ショウガツなどという)を知らせるのに、「フレ」がまわることが多い。こうした「お触れ」や回覧以外の個人あての手紙は、普通の農家で常用したものだろうか。筆で文字を書くことに慣れていなければ、筆無精にもなるであろう。やはり、ある程度の社会的地位にある人に限られていたものなのか。

今回紹介した資料②から⑤は、この手紙が雛形であったとしても、田植からノアガリまでの一連の農作業が想像できて興味深い。吹上町榎戸地区で実際にこの種の手紙が使われていたのかどうかは不明である。実際にやり取りした手紙が遺されていたなら、実物資料を補足し、説明内容をふくらませる良い資料になったであろうに残念である。

民具の寄贈を受けるということは、おおげさに言えば、それを使っていた人々、また、その時代の生きかたをも受入れるということである。単なる使用法を調査するにとどまらず、いつの時代でも共感できるような人のありようを少しでも記録することができたら、寄贈された民具も生きてくるであろう。今後の資料の収集や展示に際して心掛けていきたいものである。

拙稿を書くにあたって棚沢美喜子氏からいろいろと貴重なお話を伺うことができた。末筆ながら、当館に資料を寄贈して下さったこととともにお礼申し上げます。

調査研究報告 第5号

印刷 平成4年3月16日

発行 平成4年3月23日

編集・発行 埼玉県立さきたま資料館
〒361 行田市埼玉4834

印刷 関印刷株式会社
〒360 熊谷市宮町2丁目72

